大友府内24

中世大友府内町跡第113次調査

－集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2016

大分市教育委員会

序　　文

本書は、大分市教育委員会が集合住宅建設工事に伴い実施しました中世大友府内町跡第 113 次発掘調査の報告書です。

中世大友府内町跡は、大分川河口左岸に位置しており、鎌倉時代から戦国時代に豊後国を治めた大友氏の拠点となった都市遺跡です。特に、21 代義鎮 (宗麟) の時代には、南蛮貿易の推進により海外から様々な文化やものが伝わり、発掘調査の成果もこうした歴史事象を裏づけています。

今回の調査地点は、戦国時代のまちの様子を描いた「 府内古図 」にある「 下町 」と、江戸時代の府内城下町に新しく造られた「 東新町 」にあたり、二つの時代のまちが重複する地点に位置します。

調査の結果、近世では町屋に配された区画溝や井戸跡・土坑、中世では土師器や生活雑器などを廃棄したと考えられる土坑などを確認し、戦国時代から江戸時代に変化していくまちの様子が明らかになりました。

本書に収録されたこれらの資料が学術研究のみならず、広く市民の皆様にふれることができ、郷土の歴史学習に幅広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書の刊行に至るまで、ご理解とご協力を賜りました株式会社エフケイプランならびに関係者各位に対しまして、心より感謝申し上げます。

平成 28 年 3 月 18 日

大分市教育委員会

教育長　　三浦　享二

例　　言

1　本書は、大分市教育委員会が大分市金池町 4 丁目において、集合住宅建設に伴い平成 27 年度に調査を実施した中世大友府内町跡第 113 次調査の発掘調査報告である。

2　調査は、株式会社エフケイプラン代表取締役　古庄恭二からの依頼を受け、大分市教育委員会が実施している。

3　発掘調査における遺跡の掘削埋戻及び調査記録作成業務及び遺物の整理は、大分市教育委員会文化財課 (調査担当：小野綾夏) の委託を受け、株式会社九州文化財総合研究所 (業務責任者：杉原宗久) が行った。

4　遺構の実測･写真撮影は､株式会社九州文化財総合研究所 (業務責任者:杉原宗久) が大分市教育委員会文化財課の委託を受けて行った。

5　本書に掲載した出土遺物の実測・製図、遺構配置図・全体遺構図・個別遺構図の製図、遺物写真撮影は、株式会社九州文化財総合研究所 (業務責任者：井上索裕) が大分市教育委員会文化財課の委託を受けて行った。
総括図版の作成・製図作業は小野綾夏 (大分市教育委員会文化財課職員) が行った。

6　本書の執筆は、以下のとおりである。
第Ⅰ章　池邉千太郎 (大分市教育委員会文化財課)
第Ⅱ・Ⅲ章　株式会社九州文化財総合研究所 (業務責任者：井上索裕)
第Ⅳ章　小野綾夏 (大分市教育委員会文化財課)

7　本書の編集は、大分市教育委員会と株式会社九州文化財総合研究所 (業務責任者：井上索裕) の双方の企画の下、株式会社九州文化財総合研究所 (業務責任者：井上索裕) が行った。

8　出土遺物・記録資料は、大分市埋蔵文化財保存活用センター (大分市大字田原 337 番地の 5) に収蔵・保管している。

9　報告書の作成業務については、『大分市埋蔵文化財発掘調査報告書作成指針』に基づき実施している。

10　発掘調査に際して、以下の方々に御指導・御助言を頂いた。
小野　正敏（大学共同利用機関法人　人間文化研究機構元理事）、伊藤　正義（鶴見大学文学部教授）、金原　正明（奈良教育大学理科教育講座　古文化財科学　教授）

凡　　例

1　本書で用いた遺構略号と遺構掲載順番は、以下のとおりである。
① SK: 土坑、② SD: 溝状遺構、③ SE：井戸跡、④ SP：ピット・小穴、⑤ SX：その他

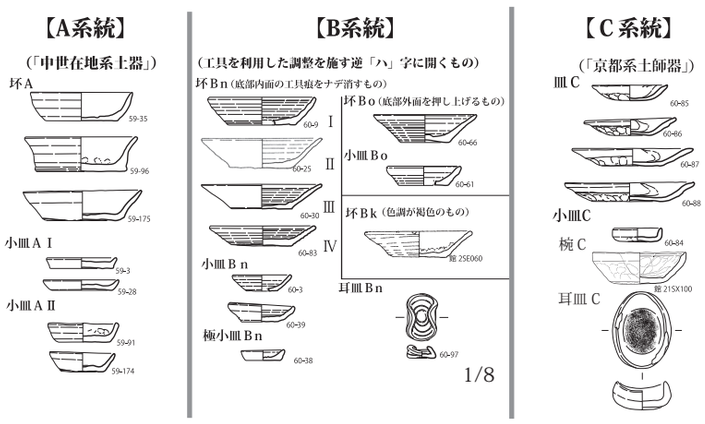
2　本書に用いた方位はすべて座標北（G.N.）である。座標は、日本測地系の平面直角座標 2 系を基点として表記している。

3　本書に掲載した遺構配置図（遺構の新旧関係を記録した図面）の表記は、新旧関係を実線で示し、下位の遺構については点線で記している。また、表記上、遺構の新旧関係が不明瞭な場合は、矢印で補足している。

4　遺構の規模と深度の単位はメートル（m）で、遺物の法量はセンチメートル（cm）で表記している。

5　本書に掲載した遺物の実測図の表記は、以下のとおりである。
(1) 遺物断面が黒塗りのもの……須恵質土器・陶器
(2) 遺物断面が灰色のもの……瓦質土器・瓦類
(3) 遺物平面の稜線と調整の変換点…… 実線
(4) 調整が同じでその単位が分かるもの……長破線
(5) 釉と付着物、黒班等その範囲を示す必要があるもの ……一点破線

6　本書に用いた出土土器の分類は以下の文献による。また、年代観は下図に示す標識資料との比較による。
長　直信 2012「 大友氏館跡出土土器の編年的検討 」『大分市市内遺跡確認調査概報 -2010・2011 年度 -』大分市教育委員会
太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊ＸＶ－陶磁器分類編－』
小野正敏 1982「15、16 世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』№.2　日本貿易陶磁研究会
上田秀夫 1982「14 ～ 16 世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究』№.2　日本貿易陶磁研究会
森田　勉 1982「14 ～ 16 世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究会』№.2　日本貿易陶磁器研究会
乗岡　実 2005「備前」『全国シンポジウム　中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年　資料集』
大分市教育委員会 2015「第Ⅲ章　第２節　大友氏館跡出土の遺物分類と時期区分について」『大友氏館跡 1 』



目　　次

第Ⅰ章　はじめに …… 1
　第１節　調査経過 …… 1
　第２節　調査組織 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 …… 2
　第１節　地理的環境 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 2

第Ⅲ章　調査の成果 …… 4
　第１節　調査の概要 …… 4
　第２節　基本層序 …… 4
　第３節　主要遺構 …… 7
　第４節　出土遺物 …… 11

第Ⅳ章　総括 …… 15
　第１節　調査地点の時期別の様相 …… 15
　第２節　まとめ …… 15

図版目次

第１図　調査地点位置図 …… 2
第２図　調査区周辺の地形と遺跡分布図 …… 3
第３図　基本層序 …… 4
第４図　第 113 次調査区遺構配置図 (1/200) …… 5
第５図　第 113 次調査区全体遺構図 (1/200) …… 5
第６図　第 113 次調査区土層図 (1/60) …… 6
第７図　SK005・SK035 遺構実測図 (1/40・1/60) …… 7
第８図　SK085・SK110 遺構実測図 (1/40・1/80) …… 8
第９図　SD025・SD030 遺構実測図 (1/60・1/40) …… 9
第 10 図　SE029 遺構実測図 (1/40) …… 10
第 11 図　出土遺物実測図① (1/4) …… 13
第 12 図　出土遺物実測図② (1/4) …… 14
第 13 図　町 113 次調査周辺の町割り
　(上：中世　下：近世)（1/2500） …… 16

表目次

第１表　遺構出土遺物一覧表① …… 17
第２表　遺構出土遺物一覧表② …… 18
第３表　遺構出土遺物一覧表③ …… 19
第４表　出土遺物観察表① …… 20
第５表　出土遺物観察表② …… 21
第６表　出土遺物観察表③ …… 22

写真図版目次

写真図版１

調査区東側（西より）

調査区西側（東より）

写真図版２

SK005 検出状況（東より）

SK035 土層断面（東より）

SK035 完掘状況（東より）

SK085 土層断面（南より）

SK085 完掘状況（南より）

SK110 完掘状況（北より）

SD030 完掘状況（北より）

SE029 井筒検出状況（西より）

写真図版３

第 11 図 -1 / 第 11 図 -4 / 第 11 図 -6

第 11 図 -22 / 第 11 図 -23 / 第 11 図 -24

第 11 図 -25 / 第 11 図 -28 / 第 11 図 -29

第 11 図 -34 / 第 11 図 -45 / 第 11 図 -51

第 12 図 -22 / 第 12 図 -23 / 第 12 図 -28

第 12 図 -30 / 第 12 図 -41 / 第 12 図 -42

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査経過

平成 27 年 4 月に、大分市金池町 4 丁目において、集合住宅建設が計画され、開発事業者から文化財課に周知の埋蔵文化財包蔵地の照会がなされた。開発予定地は、中世大友府内町跡と近世の府内城下町跡が重複する場所に位置することから、事業者と文化財課とで事業計画についての協議を進めた。その後、事業者から埋蔵文化財調査費用の積算について平成 27 年 5 月 1 日付けで依頼を受けた。

このため文化財課では、遺跡の深さや遺構密度などを把握する目的で確認調査を計画し、開発予定地が当時駐車場として使用されていたために使用者の承諾を得て、平成 27 年 5 月 26 日に実施した。その結果、中世及び近世の遺構・遺物が確認され、その情報を基に遺跡に影響を及ぼす範囲の発掘調査に要する費用積算を行い、6 月 1 日付けで確認調査結果と合せて、事業者に提示した。

これを受け、事業者と大分市教育委員会は、事業計画について協議し、発掘調査の実施等について、平成 27 年 6 月 18 日付けで、埋蔵文化財発掘調査業務等協定を締結し、この協定書に基づき、大分市金池町 4 丁目における埋蔵文化財の発掘調査委託契約を開発事業者である、株式会社エフケイプラン代表取締役　古庄恭二と締結した。

発掘調査は、開発事業者からの資金協力を得て平成 27 年 9 月 18 日に完了することを条件に行うこととし、8 月 5 日に着手し、8 月末に東側調査区が終了した後に調査区を反転し、西側調査区の調査を実施した。調査中の 8 月後半から 9 月の上旬にかけては、台風の影響や雨の影響を受けて調査の進捗に支障をきたす場面も生じたが、9 月 18 日に調査を無事に完了した。調査面積は 234.2 ㎡である。なお、遺跡の記録資料や出土遺物等の整理作業は調査の終了後に引き続き行い、報告書の作成を平成 28 年 3 月 18 日まで行った。

第２節　調査組織

調査主体者　大分市教育委員会　教育長　三浦　享二

調査体制 (平成 27 年度)

文化財課

文化財課長　塔鼻　光司
参事　長野　清尊
坪根　伸也
特別顧問　玉永　光洋
歴史資料館館長　武富　雅宣
副館長　安東　俊昭
顧問　讃岐　和夫

埋蔵文化財担当班

班長 (ｸﾞﾙｰﾌﾟﾘｰﾀﾞｰ)　池邉千太郎
事務員　小野　綾夏 (調査担当)
嘱託職員　佐藤　里恵 (調査・整理担当)

管理庶務担当班

班長 (ｸﾞﾙｰﾌﾟﾘｰﾀﾞｰ)　首藤　敏行
主査　竹中　智美
主任　朝川　貴俊

文化財保護担当班

専門員　塩地　潤一

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

大分市は九州の北東部に位置し、北側は瀬戸内海西端にあたる別府湾に面している。別府湾に面した一帯には大分平野が広がっており、由布山系を源流とする大分川が平野を東流し、東西に延びる標高約 30 ～ 40m の上野台地を境に北流へと転じて別府湾に注いでいる。

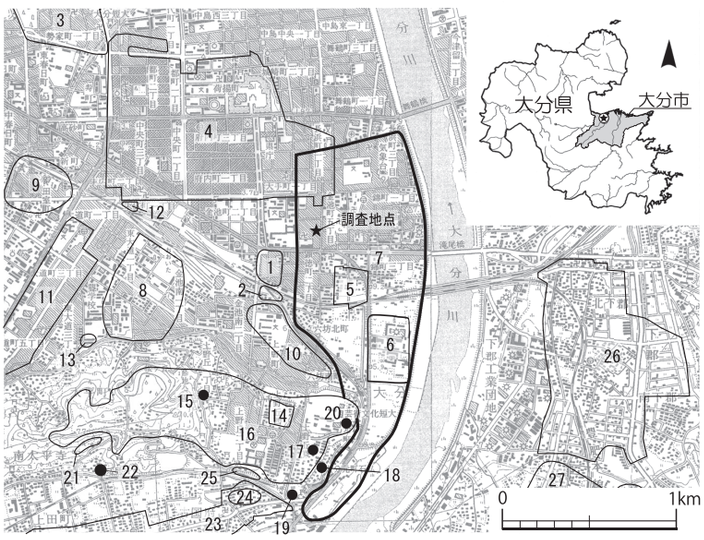
大分川はその流域に河岸段丘を発達させ、上野台地など低位の河岸段丘を形成している。さらに河口部付近には三角州が展開しており、自然堤防などの微高地と後背湿地が広がっている。今回報告する中世大友府内町跡第 113 次調査区は、この大分川河口部西岸に形成された標高 4 ～ 6m 前後の沖積地に位置している。

第２節　歴史的環境

調査区は、中世大友府内町跡の北西端、近世の府内城・城下町跡では南東側に位置しており、中世と近世の遺跡が重なる部分である。

中世府内の町の様子を描いた「府内古図」にある「下町」と、近世の府内城下町では「東新町」にあたり、「府内古図」に記された南北道路 (第４南北街路) と塩九升口から日向への近世日向道推定地の西側隣接地に位置する。後世まで残る地割等から、この通りに面して東西に長く南北に短い町屋が連なっていたと考えられている。これまでの中世大友府内町跡の発掘調査において都市の建設が開始されたと考えられるのが 14 世紀であり、その後、第 21 代義鎮 (宗麟)・第 22 代義統の治世下の 16 世紀後半に最も発展する。「府内古図」には「下町」西側の道路に面する町屋のさらに奥側（裏手）に「大雄院」と「大智寺」の名前が見える。

「大雄院」と「大智寺」はともに臨済宗南禅寺派の寺院と言われる [註 1]。大雄院は第 17 代大友義右 (1469~1496) が創建したとも、第 19 代大友義長 {~1518(1513 年)} によって建てられたとも言われるが、いずれにしても 16



1　金池南遺跡
2　上野町遺跡
3　勢家遺跡
4　府内城・城下町
5　大友館跡
6　蒋山万寿寺跡
7　中世大友府内町跡
8　大道遺跡群
9　東田室遺跡
10　若宮八幡宮遺跡
11　大道条里跡
12　末広遺跡
13　東大道遺跡
14　上野大友館跡
15　飯盛塚古墳
16　上野遺跡群
17　上野竜王畑遺跡
18　大分元町石仏
19　岩屋寺石仏
20　大臣塚古墳
21　南太平寺横穴墓群
22　伽藍石仏
23　古国府遺跡群
24　岩屋寺遺跡
25　岩屋寺横穴墓群
26　下郡遺跡群
27　羽田遺跡

1. 周辺遺跡分布図 (1/40,000)　　2. 中世大友府内町跡調査地点位置図 (1/10,000)

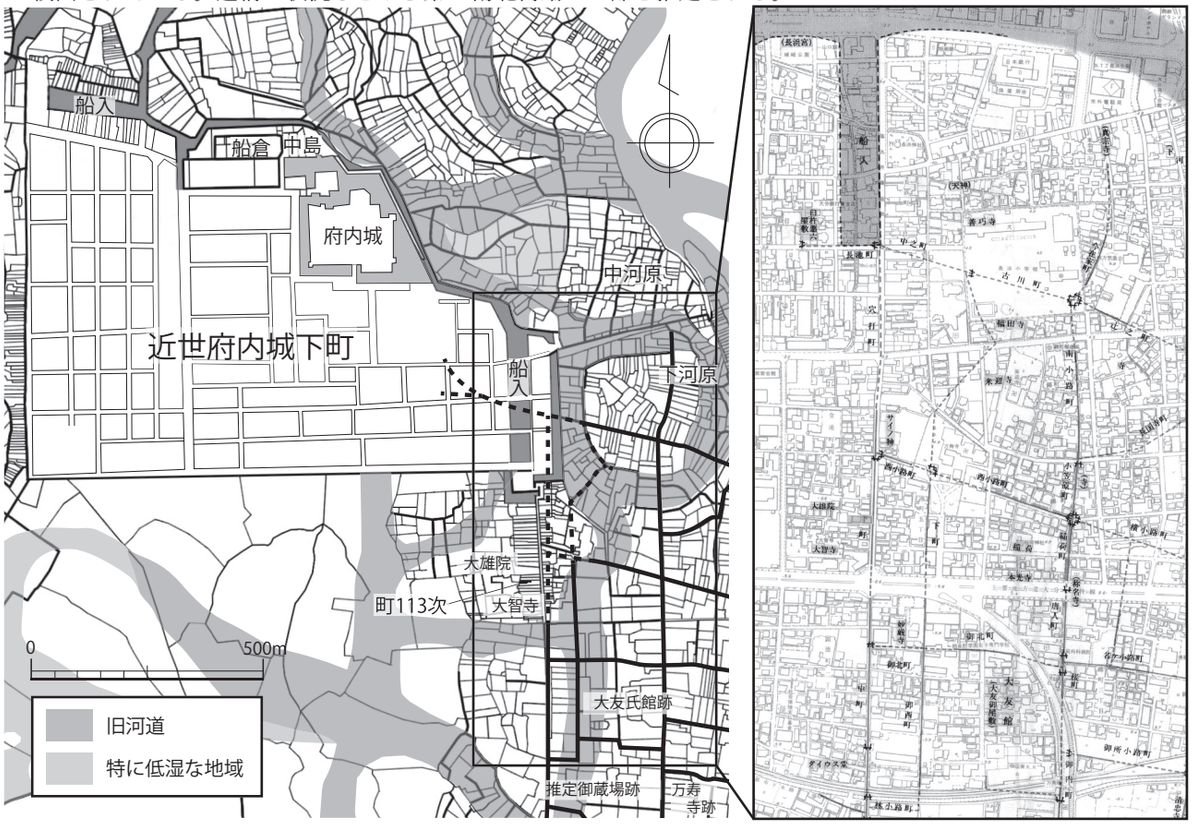
第１図　調査地点位置図

世紀初頭前後に建立された寺院と考えられる。「府内古図」に記載される以外に顕著な記録資料はなく、廃絶時期も不明である。大智寺は第 11 代大友親著が嘉慶元 (1387) 年に府内に建てた「大慧寺」が元で、海部郡丹生に移され、その後第 17 代大友義右が改修し名前を「大智寺」に改名したとされるという説や、当初から「大智寺」であったとも考えられ諸説がある [註 2)]。戦国時代末には「府内古図」に描かれ、その後、天正 14(1586) 年の島津進攻の兵火をまぬがれ現在まで位置を変えずに継続してきた施設として「府内古図」の信憑性を確かめる上でも戦国時代の府内の復元の上でも貴重な施設である。

近世の府内城下町は大友氏除国後の領主たちによって築城されていったが、その中でも、慶長 6(1601) 年に入封した竹中重利が城の修復と増築工事、城下の建設を行い、翌年には天守等城郭中心部を完成させた。また、府内城下町においては、長方形街区に短冊形地割りに区画された町屋を配置し、ここに中世大友府内町に所在した町屋や寺院を町名ごと移転させ、新たな町組に編入している [註 3)]。

今回調査を実施した中世大友府内町跡第 113 次調査区周辺では、平成 18 年度に第 74 次調査 [註 1)] が、平成 26 年に第 108 次調査 [註 4)] が行われている。

第 74 次調査区は本調査区の北西約 120m に所在し、「大智寺」や「大雄院」などの北側に位置する。調査の結果、戦国時代の東西溝や近世初頭の井戸跡が検出され、中世大友府内町の北西隅の戦国末期～近世初頭土地利用が確認できた。第 108 次調査区は、長浜 (塩九升) 通りを挟んで本調査区の東側に位置する。調査の結果、近世においては 18 世紀前半から 19 世紀中頃の遺構群が重複して検出された。「東新町」の焼継ぎ文字がある肥前染付皿が出土していることから、近世における「東新町」である可能性が示唆された。また、調査区西側端部では道路側溝とみられる溝状遺構や路盤と推定される遺構が南北に展開する形で検出されており府内城下町の塩九升口へつながる日向道の一部と推定される。中世においても近世の道路跡の下層から古い道路跡が南北に展開する形で検出されている。遺構の状況などから第 4 南北街路の一部と推定される。



1. 地形図及び明治時代の地籍図（1/5,000）　　2. 戦国時代の府内町復元図（部分）（1/10,000）

＊本図は、明治初期に作成された字切り図をもとに、古絵図や字名、地割痕跡などから諸施設や道路の位置・範囲を、地籍図（左図）、現在の地図（右図）に復元しているが、発掘調査によって諸施設の範囲の変更（大友館跡・御蔵場跡・万寿寺跡等）や施設域に、後に他の施設が造られる（寺域の一部に町が建設される等）ことなどがわかってきた。地割痕跡はその最終段階を残しており、本来の諸施設の範囲を示していない。

第２図　調査区周辺の地形と遺跡分布図

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　調査の概要

調査地は大分市金池町４丁目に所在し、周知の埋蔵文化財包蔵地である中世大友府内町跡の北西部にあたる。今回の調査は、集合住宅建設に伴い中世大友府内町跡第 113 次調査として、平成 27 年８月５日から同年９月 18 日の期間に実施したものである。調査範囲は、事前の確認調査の結果を踏まえて、建設予定地のうち建物の基礎の影響を受ける部分とし、調査は、標高約 3.80m 地点の明黄褐色粘質土から検出される遺構を対象とした。調査面積は 234.2 ㎡である。

調査の結果、近世の遺構では主に 18 世紀から 19 世紀の井戸跡や土坑、区画溝と想定される溝状遺構が検出された。中世は土師器坏 B を主体とする土坑や、備前擂鉢片や瓦質土器片などの生活雑器類の破片が含まれる土坑など、16 世紀中頃から後半以降にかけての遺構が検出された。

第２節　基本層序

第３図は、調査区南側及び西側を基本作成した土層模式図である。本調査区の地盤標高は約 4.80 ｍで、表土下には、明茶褐色土 (1)、明灰褐色砂質土 (2)、明黄褐色粘質土 (3) の順で土層が認められる。

(1) 明茶褐色土

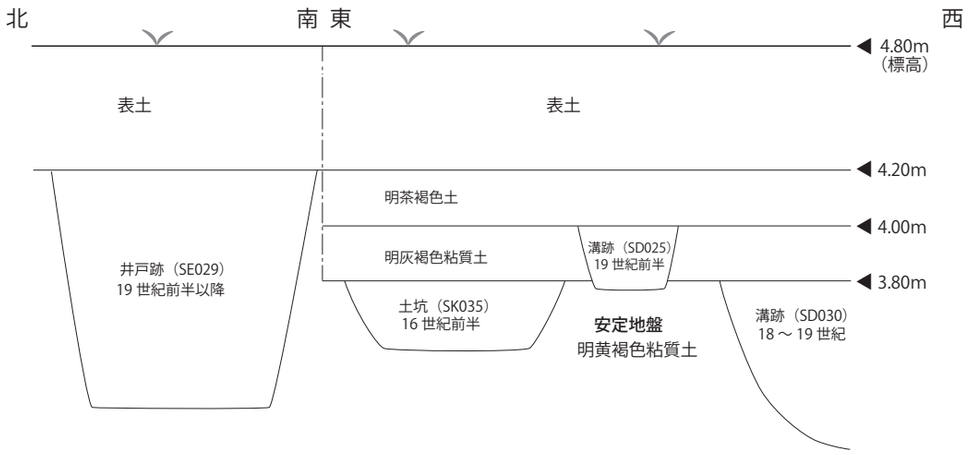
堆積厚は約 0.2m で、上層 (標高：4.3 ｍ) からは、井戸跡 (SE029) が検出され、19 世紀前半以降である。

(2) 明灰褐色粘質土

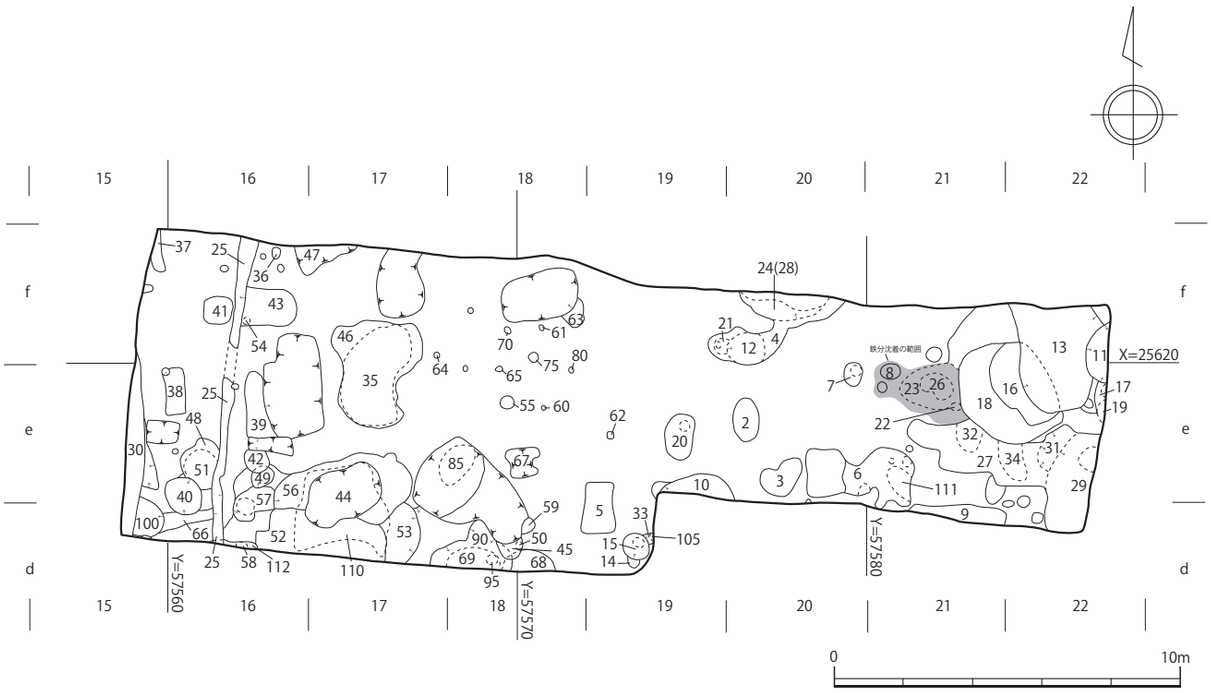
堆積厚は約 0.4m で、上層 (標高：4.1 ｍ) からは、溝状遺構 (SD025) が検出され、19 世紀前半である。

(3) 明黄褐色粘質土 (安定地盤)

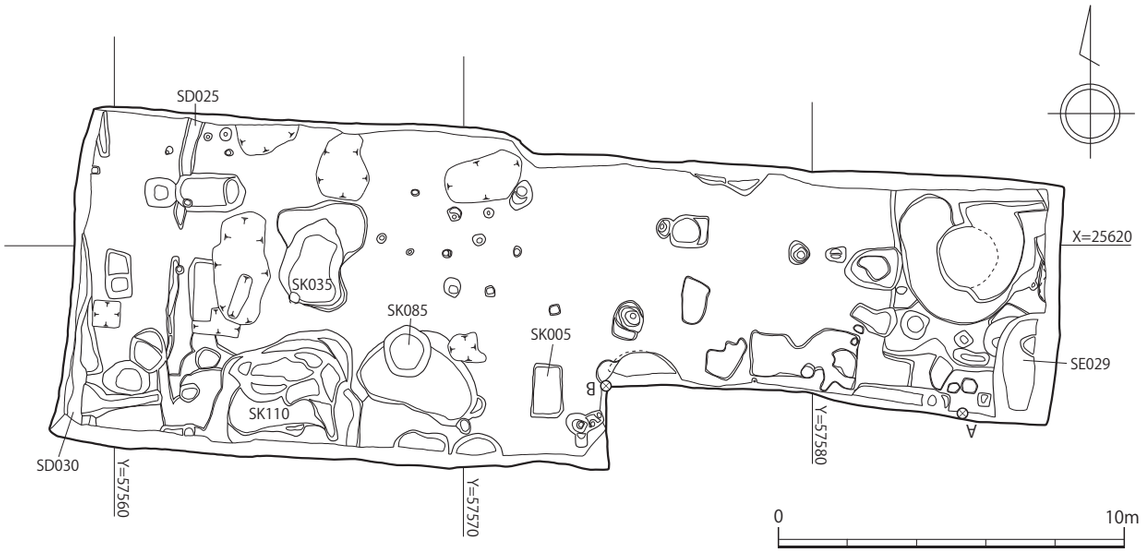
堆積厚は 0.4m 以上で、硬く締まりが強い安定した地盤である。この層では遺物の出土はなく、隣接する調査で検出している自然堤防を構成する地層と考えられる。上層 (標高：3.8m) からは、18 世紀から 19 世紀の溝状遺構 (SD030) や 16 世紀の土坑などの遺構群が確認された。今回の調査では、この層で検出した遺構群を対象とした。



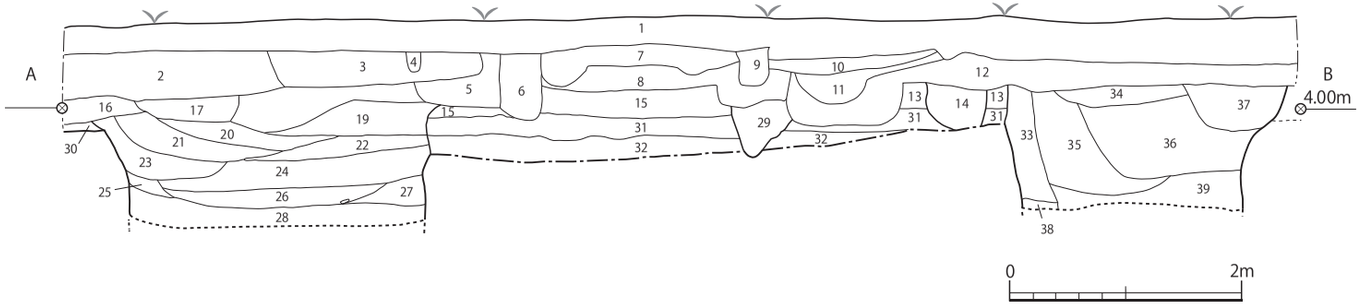
第３図　基本層序



第４図　第 113 次調査区遺構配置図 (1/200)



第５図　第 113 次調査区全体遺構図 (1/200)



1. 暗茶灰色土　バラスが敷かれ、その下位には近現代瓦片やレンガなどが入る。　※表土
2. 明茶灰色粘質土　1 ㎝程度の焼土・炭化物を少量含む。炭化物・焼土が多く残る。
3. 明茶褐色　焼土・炭化物を微量に含む。締りが強い
4. 暗茶色粘質土　こぶし大の礫・炭化物を含む。レンガを含む。　※近現代遺構
5. 暗灰茶色土　こぶし大の礫・炭化物を少量含む。締りが非常に悪い。　※近現代遺構
6. 明茶灰色土　炭化物を微量に含む。締りが強い。
7. 暗茶褐色土　近代瓦片や鉄パイプなどを含む。
8. 暗茶褐色粘質土　炭化物を微量に含む。締りが強い。
9. 暗茶色土　炭化物を微量に含む。近代陶器を含む。
10. 暗灰色土　炭化物を多量に含む。
11. 明茶灰色土　炭化物を微量に含む。1 ㎝から 3 ㎝程度の礫を含む。締りは強い。
12. 暗茶灰色粘質土　炭化物を多量に含む。締りが強い。
13. 明黄灰色粘質土　締りが強い。
14. 明茶灰色土　炭化物を微量に含む。
15. 明茶褐色土　締りが強い。
16. 暗茶褐色粘質土
17. 明黄茶色土　1 ㎝程度の焼土と炭化物を含む。
18. 明灰茶褐色土　2 ㎝～ 5 ㎝の焼土・炭化物を多く含む。
19. 明灰黄色粘質土　砂まじり、焼土など。
20. 暗灰茶褐色粘質土
21. 暗茶灰褐色粘質土　炭化物を少量含む。
22. 明灰黄色粘質土　砂まじり、焼土など。
23. 明茶褐色粘質土　砂が多く混じる。
24. 暗灰褐色粘質土　茶褐色ブロックを多く含む。
25. 明茶灰色粘質土　炭化物のかたまりを多く含む。遺物 (陶器片) がある。
26. 明灰色砂質土　若干砂が混ざる。遺物あり。
27. 明茶褐色砂質土　茶褐色ブロック・炭化物を多く含む。
28. 明茶灰色砂
29. 暗茶灰色粘質土　白色粒が中量入る。遺物なし。
30. 明黄褐色粘質土　安定地盤。
31. 明黄茶色粘質土　シルト質に近い。32 層よりは締りが弱い。
32. 明黄色粘質土　沖積層。31 層よりは黄色が強く、若干砂を含む。粘性ややあり。
33. 明灰茶色粘質土　5 ㎝以下のブロック土を多く含む。砂が集中して混ざる。
34. 明灰茶色粘質土　5 ㎝程度の黄褐色ブロック土を多く含む。小礫も含む。締りも強く、粘性も強い。
35. 暗茶灰色粘質土　全体的に 5 ㎝以下の褐黄色ブロックを非常に多く含む。
36. 暗灰茶色粘質土　全体的に 5 ㎝以下の褐黄色ブロックを非常に多く含む。
37. 明茶褐色粘質土　黄色ブロック土を含む。
38. 明灰黄色砂　完全に砂である。
39. 明灰茶黄色砂質土　3 ㎝程度の黄色ブロックを含む。砂の方が多い。

第６図　第 113 次調査区土層図 (1/60)

第３節　主要遺構

土坑

SK005(第７図)

調査区中央南側の d18 ～ 19･e19 グリッドで検出した土坑である。平面形状は方形を呈しており、長軸 1.56m、短軸 0.94m で最大深度は 0.40m である。埋土は暗灰褐色粘質土単層で遺構からは、土師器坏 B や龍泉窯系青磁碗 (大宰府椀Ⅱ類)、染付筒型碗等多様な遺物が出土していることから廃棄土坑と考えられる。遺構の時期は出土遺物から 19 世紀前半と考えられる。

SK035(第７図)

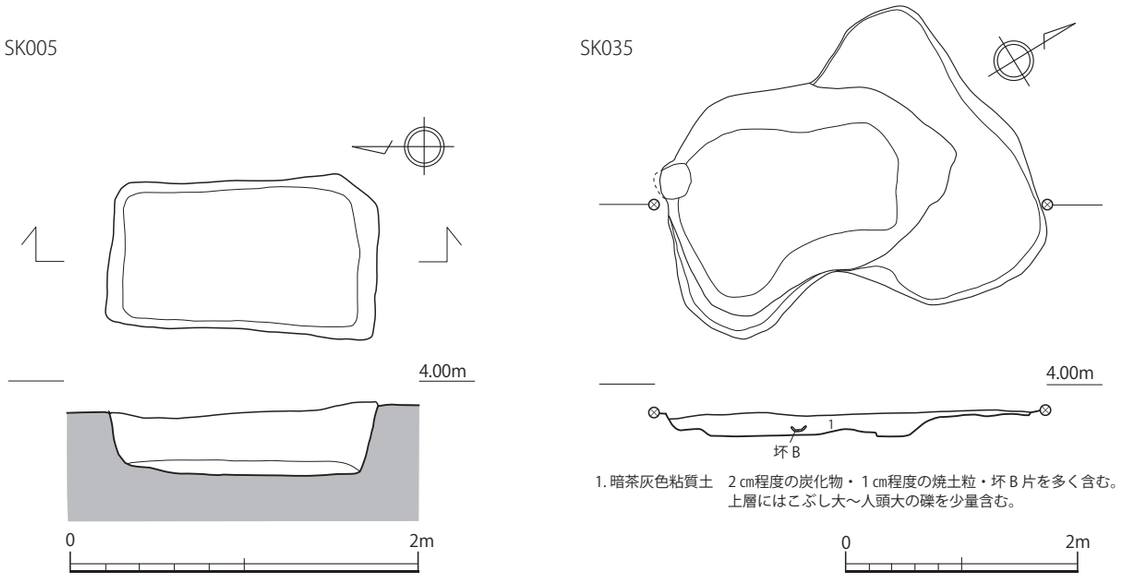
調査区西側の e・f17 グリッドで検出された土坑である。検出時は遺構プランがはっきりせず溜まり状になっていたため S046 として掘下げを行った結果、検出面から約 0.04m 掘下げた時点でプランを検出した。平面形状は不整楕円形を呈し、長軸 2.52m、短軸 1.62m、最大深度は 0.21m を測る。埋土は暗茶灰色粘質土の単層で炭化物や焼土粒を多く含むことから人為的に埋め戻されたと考えられる。遺構からは、土師器坏 B、Ⅲ C、坏 a(白色系)、瓦器椀等が出土しているが、中でも土師器坏 B は完形品 1 点を含めて破片が大量に出土している。遺物の出土状況から廃棄土坑と考えられる。遺構の時期は出土遺物から 16 世紀中頃以降と考えられる。

SK085(第８図)

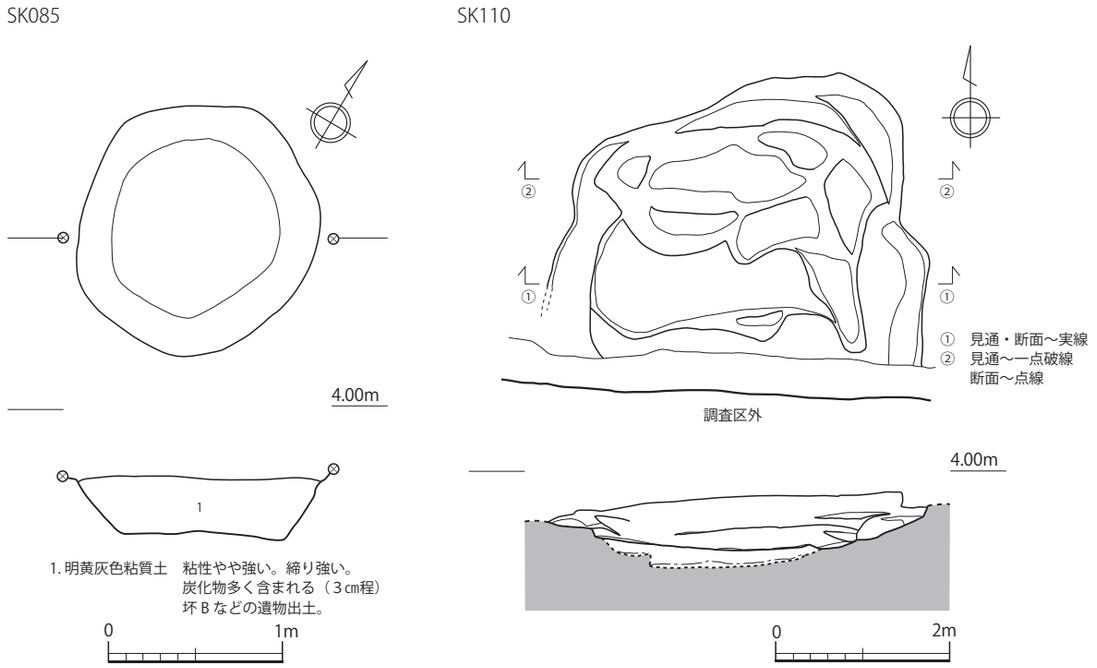
調査区西側の e17 ～ 18 グリッドで確認された土坑で、カクランを 0.05m 掘下げた時点で検出された。平面形状は円形を呈しており、長軸 1.48m、短軸 1.32m、最大深度 0.39m を測る。埋土は明黄灰色粘質土の単層で炭化物を多く含むことから、人為的に埋め戻されたと考えられる。遺構からは、土師器坏 B、備前擂鉢、白磁碗 (大宰府椀Ⅳ類) 等が出土しており、遺物の出土状況から廃棄土坑と考えられる。遺構の時期は出土遺物から 16 世紀と考えられる。

SK110(第８図)

調査区南西側の d16 ～ 17・e16 ～ 17 グリッドで検出された土坑であり、遺構の南側は調査区外へ展開している。周辺遺構との重複関係は、SK110 がカクラン (S044) と SK052 に切られている。平面形状は遺構南側の状



第７図　SK005・SK035 遺構実測図 (1/40・1/60)



第８図　SK085・SK110 遺構実測図 (1/40・1/80)

況が不明であるが、東西 4.30+αm、南北 3.14+αm、最大深度 0.63m を測り不整形な楕円形を呈するものと考えられる。埋土は暗茶色砂質土である。遺構からは、土師器小皿 B、皿 C、雁振瓦、唐津染付片等が出土している。遺構の時期は出土遺物から 18 世紀前半頃と考えられる。

溝状遺構

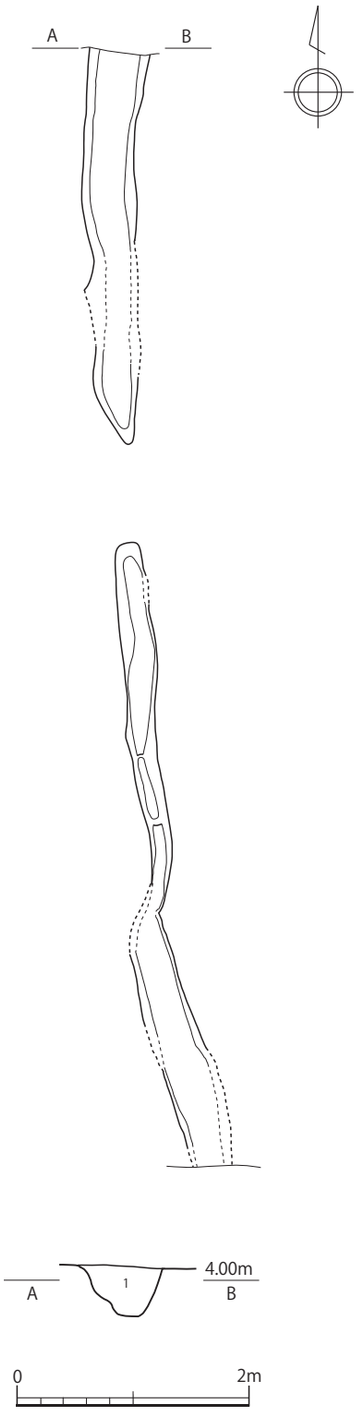
SD025(第９図)

調査区西側の d・e・f16 グリッドで検出された南北に走る溝状遺構である。遺構はほぼ直線状であり、主軸方向 N-6°-E で、遺構の北端は調査区外に延びている。遺構は、長さ 6.80 ＋ αm、幅 0.16m ～ 0.70m、深度は 0.02m ～ 0.40m を測り、検出面が下がったことから、深度の浅い部分であった中央部分が途切れる状態になったと考えられる。土層の確認から最大幅約 0.70m、最大深度約 0.40m を測り、断面形状は逆台形状である。埋土は黄色ブロックを含む暗灰茶色粘質土の単層で締まりが強く粘性がある。遺構からは土師器坏 B、皿 C、国産陶器唐津擂鉢、陶胎染付碗片等が出土している。遺物から遺構の時期は 19 世紀前半頃と考えられる。

SD030(第９図)

調査区西端の d・e・f15 グリッドで検出された南北方向に走ると考えられる溝状遺構である。周辺遺構との重複関係は、SD030 が SK100 を切っている。主軸方向 N-3°-E を示し、土層観察により遺構東側の立ち上がり部分が確認されたが、遺構の西半分は調査区西側へ展開している。溝の規模は、大部分が調査区外へ展開しているため不明であるが、検出された部分で長さ 5.90+αm、最大幅 0.52m、最大深度 0.32m を測る。断面形状も不明である。埋土は土層観察から３層に分類され、土層の状況から人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺構からは、土師器坏 A、坏 B、皿 C、土師質土器火鉢・甕、国産陶器備前碗、瓦類、京焼風陶器碗等が出土している。遺構の時期は、出土遺物から 18 ～ 19 世紀と考えられる。

SD025



1. 暗灰茶色粘質土　黄色ブロック (5 ㎝) を含む。締まりは強く、粘性がある。
近世の溝である。

SD030

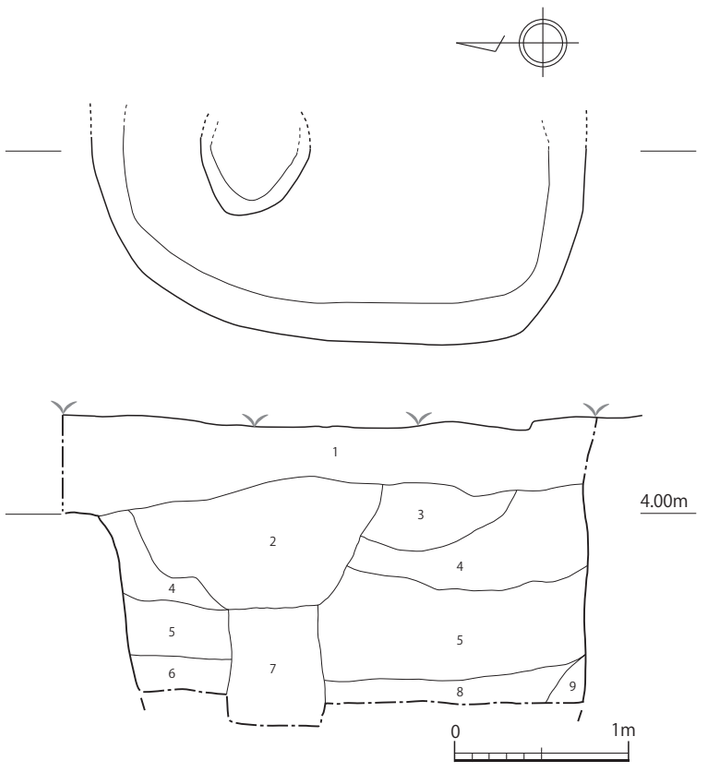
1. 暗灰茶色粘質土　粘性は強く、締りも強い。5 ㎝程度の黄色ブロックを含む。
2. 暗茶灰色粘質土　粘性は強く、締まりも強い。こぶし大の礫を一部分に含む。遺物を含む。
3. 明灰色粘質土　粘性が非常に強く、締まりが強い。

第 9 図　SD025・SD030 遺構実測図 (1/60・1/40)

井戸跡

SE029(第 10 図)

調査区東側の d・e22 グリッドで検出した井戸跡であり、遺構の東半分は調査区外に展開している。周辺遺構との重複関係は、SE029 が SK031 を切っている。遺構検出面での平面形状は円形を呈するものと想定され、直径は 3.20m 前後を測り、中央部分北側で直径 0.60m の円形プランが確認できた。安全面を考慮して約 0.90m 掘下げた時点で掘削を中止した。掘削した範囲では井筒は残存しておらず、痕跡のみであった。掘削可能範囲の最下層である第 6 層の茶褐色砂質土・第 8 層の明茶褐色粘質土は、砂質や粘質であるが湧水は見られなかった。また黄色ブロック土を多く含むことから人為的に埋め戻されたと考えられる。遺構からは、土師器坏 A・小皿、土師質土器大甕、瓦質土器火鉢、龍泉窯系青磁碗、国産陶器刷毛目唐津灰入・上野高取瓶、京信楽焼碗、染付筒型碗等多くの遺物が出土している。遺構の時期については、井戸掘削時の裏込め土と考えられる第 6 層から土師器坏 A・小皿、国産陶器常滑甕が、井戸廃絶時の埋土と考えられる第 7 層から土師器坏 A、白色系土師器、白磁、染付 (近世) が出土していることから、最終的な廃絶時期は 19 世紀前半であると考えられる。



1. 暗茶灰色土　バラスが敷かれ、その下位には、近現代瓦片やレンガが入る。
2. 明茶灰色粘質土　炭化物を中量、1 ㎝程度の黄色粒を全体に含む。18c 中頃以降の遺物を含む。締りやや悪く、粘性やや強い。
3. 明灰茶褐色粘質土　明灰粘質土ブロックを多量、黄色ブロック・黄色砂を少量含む。締まりはやや悪く、粘性やや強い。
4. 暗茶褐色粘質土　明黄褐色土ブロックを全体的に多量に含む。締まりはやや悪く、粘性あり。
5. 明茶褐色粘質土　明灰色ブロックと明黄褐色ブロックを大量に含む。4 層より砂を含む。
6. 茶褐色砂質土　明黄褐色ブロックを中量含む。全体的に砂が混ざるため、締まりはやや悪い。
7. 暗灰色粘質土　粘性が非常に強く、1 ㎝程度の黄色粒を多量に含む。在地系土師器片を少量含む。井戸枠は見られない。
8. 明茶褐色粘質土　明黄褐色シルト質土ブロックを多量に含む。粘性が非常に強く、締まりはやや悪い。
9. 明灰色砂　地山の下位より検出できる砂層。

第 10 図　SE029 遺構実測図 (1/40)

第 4 節　出土遺物

今回の調査では、コンテナ 14 箱の遺物が出土した。出土遺物は弥生時代から 19 世紀に至るまで幅広い時代にわたっているが、主体となるのは 16 世紀中頃～後半、18 世紀～ 19 世紀にかけての遺物である。主要遺構の時期を示すものや特殊な遺物を中心に掲載、報告を行う。また、本文中に記載がなかった遺構及び出土遺物については遺構出土遺物一覧表 (表 1 ～ 3) を、遺物の種類・名称・法量については出土遺物観察表 (表 4 ～ 6) に示している。

SK005 出土遺物 (第 11 図)

1 は染付皿の底部片であるが、周囲を加工しメンコとして転用されたと考えられる。2 は龍泉窯系青磁碗 (大宰府椀Ⅱ類) で、外面に蓮弁が残る。3 は陶器の小坏であり、猪口と考えられる。4 は桟瓦で外面に刻印が認められる。5 は土錘で、6 は土製のメンコである。

SK010 出土遺物 (第 11 図)

7 ～ 9 は土師器坏 B で、底部に回転糸切痕を有する。10 は瓦質土器鍋で、口縁部が若干「く」の字を呈す。摩滅が激しいため調整は不明である。11 は常滑焼の甕の胴部と考えられる。

SK024 出土遺物 (第 11 図)

20 は瓦質土器火鉢である。口縁部は玉縁状に仕上げ、内外面ともに回転ナデとミガキがみられる。

SK035 出土遺物 (第 11 図)

22 ～ 30 は土師器 B 系統のものである。22・23 の極小皿 B、24・25 の小皿 B と小型の皿は 2 法量あり、26 ～ 30 は坏 B に分類される。31 は土師器小皿 C で、内外面ともに回転ナデがみられる。32 は土師器皿 C の口縁部分であり、薄く丁寧なつくりである。33 は中国産の青磁碗である。34 は同安窯系青磁碗（太宰府椀Ⅰ -1-b 類）で外面に片彫文、内面に櫛描文がみられる。

SK045 出土遺物 (第 11 図)

35 は土師器坏 A の底部である。36 は土師器坏 B である。37・38・39 は土師器皿 C である。39 は復元口径が 15.0cm とかなり大きいものである。

SK046 出土遺物 (第 11 図)

40 は土師器坏 B である。41・42 は薄手の土師器皿 C である。43 は砥石である。中央部分がやや窪んでおり、使用痕が認められる。

SK053 出土遺物 (第 11 図)

44 は瓦質土器火鉢である。45 は瓦質土器鉢と考えられ、外面に花形のスタンプが刻印されている。46 は龍泉窯系青磁碗で、精緻なつくりである。高台部分がかなり肥厚している。

SK056 出土遺物 (第 11 図)

47 は白磁皿の口縁部分である。48 は白磁の碗で、外面が一部露胎している。49 は青磁瓶と思われ、色調は淡緑灰色である。50 は土錘である。

SK068 出土遺物 (第 11 図)

51 は石臼の上部であり、下面が摩耗している。

SK085 出土遺物 (第 11 図)

52・53 は土師器小皿 B であり、52 の底部には板状圧痕がみられる。54~57 は土師器坏 B である。58 は瓦質土器擂鉢 (A1 類) である。59 は白磁碗 (大宰府椀Ⅳ類) で、玉縁口縁である。60 は白磁碗で、色調は淡緑灰色を示す。61・62 は備前擂鉢 (中世 5 期) で、63 は国産陶器常滑産の大甕と考えられる。外面に焼成時のものと思われる付着物がみられる。

SK090 出土遺物 (第 12 図)

1 は土師器坏 A である。2 は土師器小皿 B で、3 は白色土師器の底部と思われる。4 ～ 12 は土師器皿 C で、全て外面に強いヨコナデがみられる。13 は土錘である。

SK110 出土遺物 (第 12 図)

16 は土師器極小皿 B である。17 は土師器坏 B で、底部に糸切痕がみられる。18 ～ 20 は土師器皿 C である。18 は薄く、19 は厚いつくりである。21 は須恵質土器の片口鉢である。22 は雁振瓦で、内外面に煤が付着している。

SD025 出土遺物 (第 12 図)

23 は国産陶器唐津産擂鉢である。色調は暗褐色を呈し精緻な作りである。

SD030 出土遺物 (第 12 図)

24 は土師器坏 A で、色調は橙茶色である。25 は京焼風陶器の碗で外面に二次被熱の痕跡がある。26 は国産陶器の土瓶の胴部と考えられる。

SE029 出土遺物 (第 12 図)

28 は土師器坏 A で、口縁部分がほぼ直線的に立ち上がる。30 は国産磁器の皿である。内面に蛇の目釉剥ぎが認められる。31 は国産陶器唐津産筒型碗である。32 は国産陶器常滑産甕の胴部と考えられる。33 は国産陶器唐津産甕である。外面に刷毛目の文様があり、精緻な作りである。

SP015 出土遺物 (第 12 図)

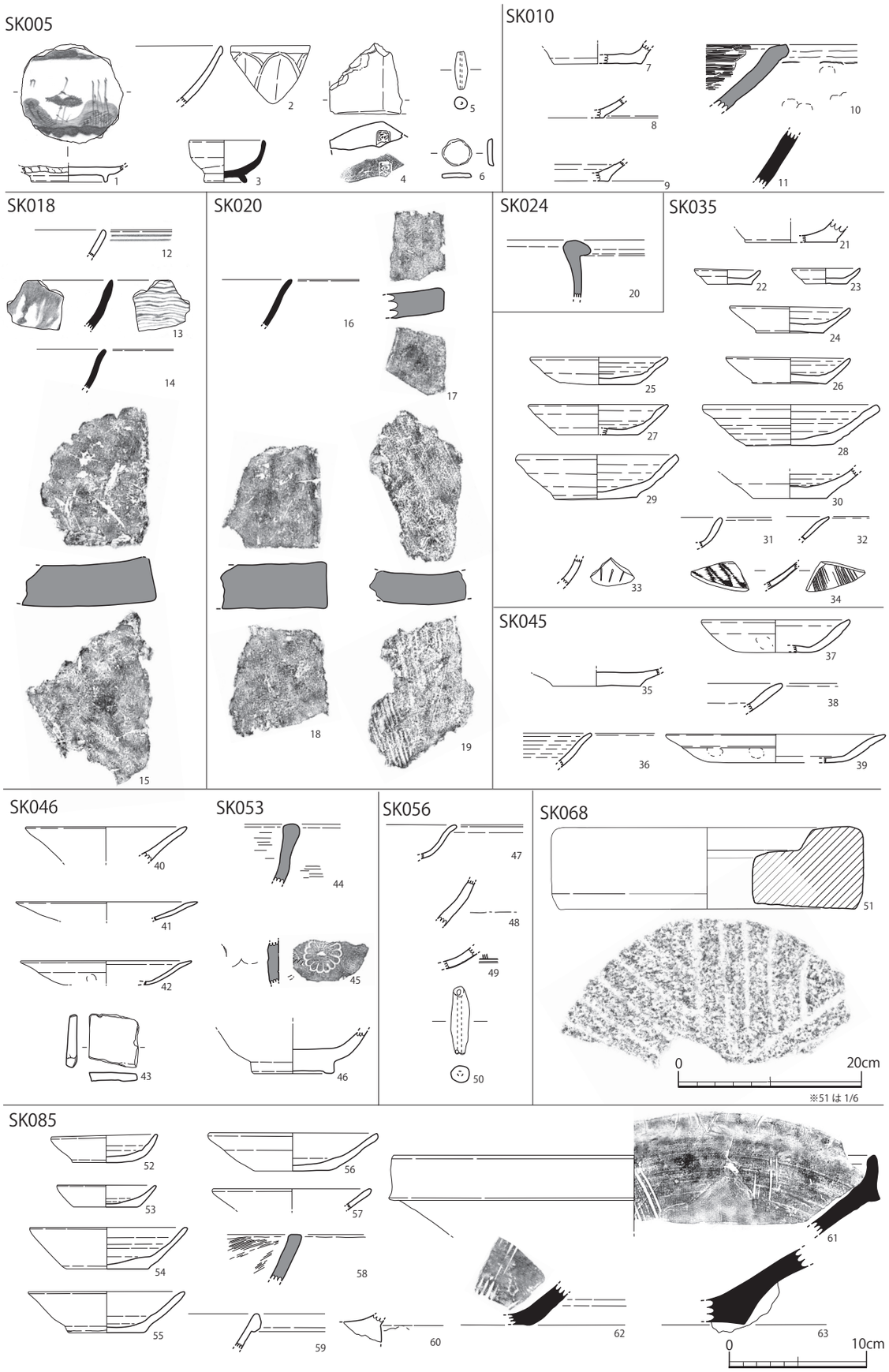
34 は国産陶器志野焼と考えられる向付である。

SP080 出土遺物 (第 12 図)

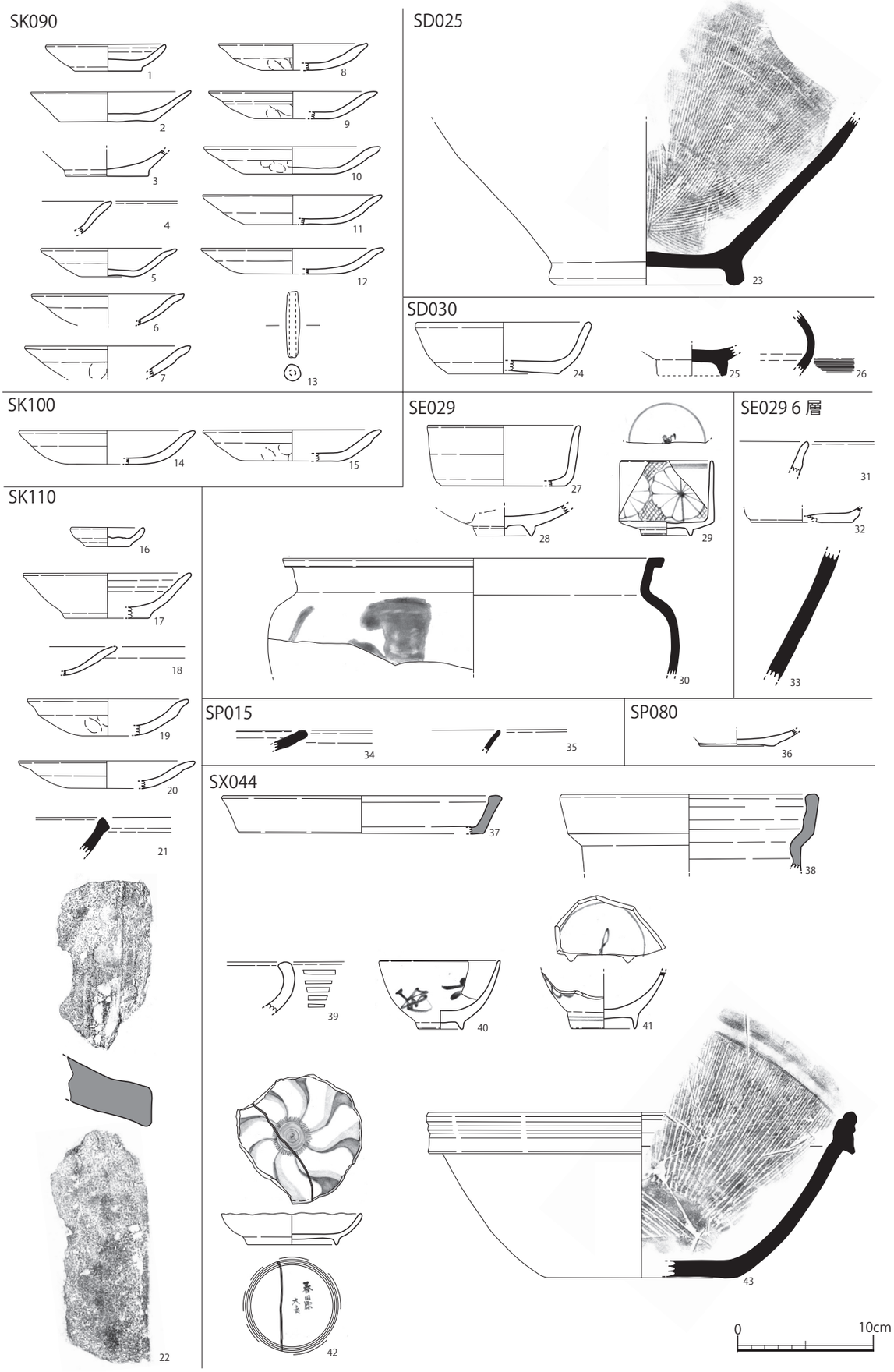
36 は土師器坏 B である。内外面に回転ナデが、底部には糸切痕がみられる。

SX044 出土遺物 (第 12 図)

37・38 は瓦質土器火鉢である。39 は龍泉窯系青磁香炉と考えられる。40・41 は国産磁器肥前系の碗で 40 は外面に「大阪新町お笹紅」の文字があり、紅皿と考えられる。42 は国産磁器肥前系の皿で、高台内側に朱色で記名がある。43 は国産陶器備前産擂鉢 (近世 1 期) である。



第11図　出土遺物実測図①　(1/4)



第 12 図　出土遺物実測図②　(1/4)

第Ⅳ章　総括

第１節　調査地点の時期別の様相

調査地点の東側には現在長浜（塩九升）通りが南北に走っている。この道は、中世には第４南北街路、近世には日向道推定地に相当し、中世から現在まで続く市街地の主要幹線道路として機能しており、この道の沿線にはまちが形成されていた。地籍図には、近世の推定日向道に沿って形成された東新町の地割が現在でも明瞭に残り、東西方向に奥行きが長く南北方向の幅の狭い地割がみられる。今回の調査は対象敷地の面積が非常に狭く廃土処理の関係から、面積 234.2 ㎡の調査区を東側と西側で反転し実施した。

調査の結果、標高約 3.8 m地点で安定地盤（明黄褐色粘質土）が検出でき、その上面で大きく 16 世紀代と 18 ～ 19 世紀の二時期に比定される遺構を確認した。中世に関しては、16 世紀前半以前の遺構はなく、16 世紀前半～中頃の坏 B を主体とする土坑 (SK035) や、16 世紀後半の京都系土師器や生活雑器類などが出土する土坑 (SK085) が見つかった。中世の遺構は調査区西側に位置し、東側は皆無であった。これらの土坑は、第４南北街路を基準とした奥行き 20 ～ 30 mの推定町屋域の範囲 (註 4) よりさらに西側に集中しており、周辺の調査で確認した町屋の空間利用とは異なっていた。近世の遺構状況としては、主に 18 ～ 19 世紀の井戸跡や土坑、区画溝と想定される溝状遺構が検出できた。その中でも、溝状遺構 (SD030) は、調査地点東側を通る推定日向道 (108SF100) (註 4) より約 50 m西側の地点に位置し、東新町の西側を区画した背割溝であることが考えられる。井戸跡や土坑は調査区の中でも東側に集中しており、西側の背割溝に向かって希薄になる様子が見られた。なお、弥生時代～中世前半期の遺物は出土しているものの遺構は確認されない。

第２節　まとめ

1. 中世のまち「下町」

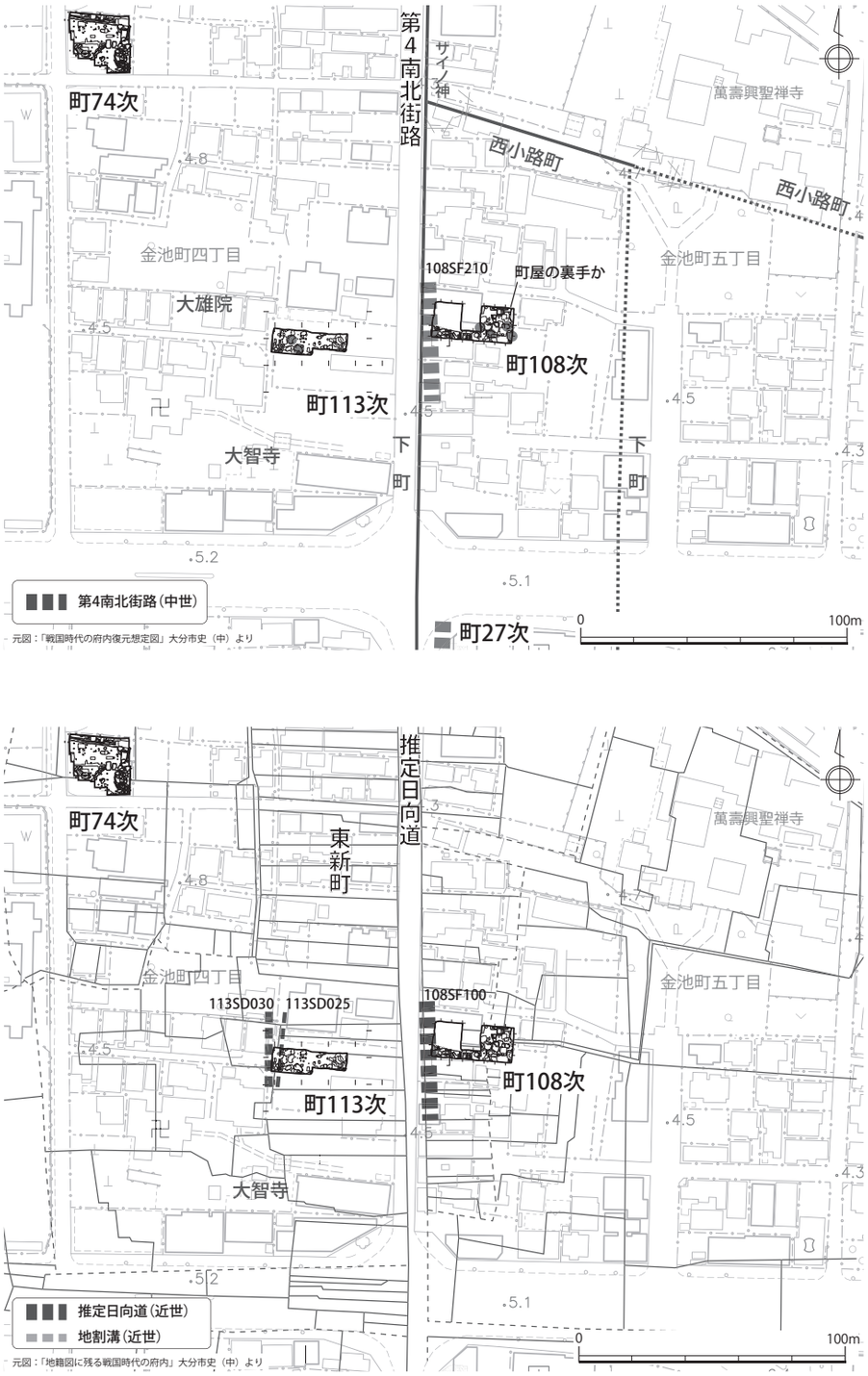
調査地点は、「府内古図」によると第４南北街路の東西両側に面する町「下町」に該当する。下町の中心を通る第４南北街路は、町 113 次より約 100 m南側で行った町 27 次地点において確認されており、15 世紀末～ 16 世紀初頭には敷設され、16 世紀後半～末頃までは機能している (註 5)。さらに、大きな特徴として、第４南北街路沿いの下町裏手 (西側) には大雄院と大智寺が位置している。大雄院は 16 世紀初頭前後に建立、大智寺については 15 世紀後半に再興したとされ、島津氏の侵攻をまぬがれ現在まで場所を変えず存続している。史料から、両寺院は、第４南北街路の機能していた時期と概ね同じ時期に下町西側に位置していたことが推測される。

今回の調査地の東側にあたる町 108 次調査地点は、同じく下町の推定地であり、調査時に検出した第４南北街路 (108SF210) から約 30m 東側に井戸跡や土坑など町屋の裏手に配される遺構 (註 6) が見つかっている。これら周辺の調査結果から、中世（戦国時代末）の下町は、第４南北街路を挟んで両側町を形成していた可能性が高いと言えるが、今回の調査結果はこれを裏付けることはできなかった。また、今回近世の遺構として報告した調査区を南北に走る溝状遺構 (SD030) は、町屋の背割であると同時に、西側に位置する大智寺との境界施設であった可能性も想定される。すなわち、今回の調査で検出した中世の遺構群は、「大智寺」に関連するものである可能性が示唆される。

2. 近世のまち「東新町」

東新町は、府内城・城下町の塩九升口から南下する日向道に面して東西両側に広がる町である。府内城下は、府内・松末・千手堂・笠和・同慈寺の５つの町組に分かれており、東新町は府内町 (組) に属している。しかしながら、いわゆる「御門内」の町ではなく外町として形成された町である。1602 ～ 1605 年に竹中重利が、府内城築城とともに大友時代の府内町を移転し新たに町割りを行った際に、東新町は戦国時代末期の姿を描く「府内古図」から読み取れる中世府内町からの移転した町ではなく、17 世紀中頃に新たに形成された町である (註 7)。しかし今回の調査地点やその周辺では、17 世紀中頃の東新町形成時期を明確に示すものは確認できておらず、東新町形成後である 18 世紀～ 19 世紀の町屋に関連する遺構や遺物のみが確認されている。

以上の点を踏まえて、今後周辺で調査を行う際の課題を抽出すると、①中世下町の町屋の展開範囲、②府内古図に記載された大智寺と大雄院に関連する明確な遺構の探索、③近世東新町の形成された時期である 17 世紀中頃の遺構や遺物の有無などの確認等が掲げられる。



第 13 図　町 113 次調査周辺の町割り（上：中世　下：近世）（1/2500）

【参考文献】

註 1：大分市教育委員会 2007「大友府内 11」（中世大友府内町跡第 74 次調査報告）
註 2：大分市教育委員会 2009「丹生川坂ノ市条里跡　丹生遺跡群」経営体育成基盤整備事業（丹川地区）に伴う発掘調査報告書　2009
註 3：大分市教育委員会・中世都市研究会 2001『中世大友再発見フォーラム南蛮都市・豊後府内　都市と交易』
註 4：大分市教育委員会 2014「大友府内 21」　中世大友府内町跡第 108 次調査
註 5：大分市教育委員会 2008「大友府内 12」　都市計画道路六坊新中島線改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (3)
註 6：註 4 と同じ
註 7：木村幾多郎 2001「豊後府内城下町移転と旧府内」『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会

第１表　遺構出土遺物一覧表①

S番号	遺構番号	種別	土色	出土遺物	切り合い	備考	時期	グリッド
1		欠番						
2		土坑	暗灰色粘質土	国産陶器片・土瓶片 国産磁器片(肥前系) 瓦類：平瓦 動・植物遺体：貝			近世	M-2-e20
3			暗灰色粘質土					M-2-e20
4		堆積層	暗灰色粘質土	土師質土器片 国産陶器：折縁皿		S012・021・024・028検出時	近世	M-2-f19・f20
5	SK005	土坑	暗灰褐色粘質土	土師器：坏B 瓦質土器：風炉・深鉢型火鉢 中国磁器：龍泉窯系青磁碗(大宰府椀Ⅱ類) 国産陶器：染付碗(メンコ状)・猪口(関西系)・染付筒型碗・甕(備前)・土瓶蓋 瓦類：平瓦・丸瓦 土製品：メンコ・土錘			19世紀前半	M-2-d18・d19・e19
6		堆積層	暗灰色粘質土	国産磁器：型紙刷片		S111検出時	近現代	M-2-e20・e21
7		柱穴	暗灰褐色粘質土	土師器：坏a・坏c 土師質土器片 瓦質土器片 玉状石製品			近世	M-2-e20
8		ピット	暗黄灰色砂質土					M-2-e21
9		井戸跡		土師質土器片 国産陶器：焼締陶器片 国産磁器片(肥前系) 壁土 自然遺物：玉砂利			近世	M-2-d21
10		井戸跡		土師器：坏A(糸切) 須恵質土器：甕(亀山系) 土師質土器：鍋B 黒色土器：椀B類 国産陶器：甕(備前系)・甕(常滑か)・甕片 自然遺物：玉砂利			近世	M-2-e19・e20
11		土坑	暗褐色粘質土	土師質土器片 国産陶器：擂鉢(唐津)・刷毛目唐津 国産磁器：型紙刷 瓦類：平瓦・軒丸瓦・軒平瓦 自然遺物：玉砂利	13→11,17→11		19世紀中頃以降	M-2-e22・f22
12		土坑	暗灰色粘質土	土師質土器片 中国磁器：龍泉窯系青磁片 国産陶器：壺(備前系)・焼締片・肥前系陶器	21→12		近世	M-2-e20・f20
13		井戸跡	灰褐色砂質土	瓦質土器片 瓦器：椀(和泉型) 国産陶器：碗(京信楽系)・外青磁碗・染付丸碗・甕(唐津)・染付片 瓦類：平瓦 鉄製品：不明	13→11,16→13		19世紀中頃以降	M-2-e22・f22
14		ピット		土師器：皿C 土師質土器片 玉状土製品	14→15		16世紀後半	M-2-d19
15		柱穴	暗灰色粘質土	土師器：皿C 瓦器片 国産陶器：焼締・碗(唐津)・陶胎染付か・鉢(唐津) 国産磁器：白磁片 自然遺物：玉砂利	14→15,15→33		18世紀前半以降	M-2-d19
16		S018の井筒抜き取り痕	暗灰褐色粘質土	土師器片 須恵器片 瓦質土器片 国産陶器：土瓶・土瓶蓋・染付徳利・甕(小石原)・碗(刷毛目唐津)・染付皿 国産磁器：急須(瀬戸美濃)・型紙刷碗・型紙刷小坏 瓦類：平瓦・瓦玉	18→16,16→13		19世紀中頃以降	M-2-e21・e22・f21・f22
17		土坑		土師質土器：鉢片 瓦質土器片・鍋D 中国磁器：白磁碗 国産陶器：陶胎染付碗 瓦類：平瓦 石製品：砥石 自然遺物：玉砂利	17→11,19→17		近世	M-2-e22
18		井戸跡	灰褐色粘質土	土師質土器：大甕 国産陶器：碗(刷毛目唐津)・皿(刷毛目唐津)・陶胎染付碗・備前片・擂鉢(唐津) 国産磁器：碗(肥前系) 瓦類：平瓦	18→13,18→16, 32→18,34→18, 23→18		19世紀前半	M-2-e21・e22・f21
19		土坑	暗灰黄色粘質土	国産陶器：染付紅皿・染付丸碗	19→17		18世紀～19世紀	M-2-e22
20		柱穴	(柱穴)暗灰色粘質土 (柱痕)暗灰褐色粘質土、暗褐色砂質土	土師器片(柱痕)・皿C 須恵器：甕 瓦質土器片(柱痕) 中国磁器：龍泉窯系青磁碗 国産陶器：天目碗・内野山窯皿・備前焼片・碗(唐津)・擂鉢(唐津か)・関西系陶胎染付碗片・陶胎染付碗片(柱痕) 瓦類：平瓦 鉄製品：不明 自然遺物：玉砂利			18世紀～19世紀前半	M-2-e20
21		ピット		国産陶器：擂鉢(唐津)	21→12		19世紀前半	M-2-f19・f20
22		ピット	灰褐色粘質土	瓦類：平瓦	23→22		不明	M-2-e21
23		土坑	暗黄灰色粘質土		23→22,26→23, 23→18			M-2-e21
24		土坑	暗茶色粘質土	土師器：皿C 瓦質土器片 国産陶器：擂鉢(備前・唐津)・碗・急須 瓦類：平瓦 自然遺物：玉砂利		S028と同一遺構	現代	M-2-f20
25	SD025	溝跡	暗灰色粘質土	土師器：坏B・皿C 国産陶器：擂鉢(唐津)・陶胎染付碗片 自然遺物：玉砂利	25→112, 66→25,43→25, 51→25		19世紀前半	M-2-d16・e16・f16
26		土坑	暗灰色粘質土、暗褐色砂質土、茶褐色砂質土、暗灰色砂質土	土師質土器：大甕 中国磁器：龍泉窯系青磁片 国産陶器：急須(京信楽) 瓦類：平瓦 自然遺物：玉砂利	26→23		近世	M-2-e21

第２表　遺構出土遺物一覧表②

S番号	遺構番号	種別	土色	出土遺物	切り合い	備考	時期	グリッド
27		堆積層		土師質土器：鍋A・甕 国産陶器：染付碗・染付筒型碗・内野山窯皿・染付片 自然遺物：玉砂利		S029・031・032・034 検出時	19世紀前半	M-2-e21・e22
28		土坑	暗灰褐色粘質土、暗茶灰褐色粘質土	土師器：坏B・皿C 中国磁器：景徳鎮窯系青花碗 国産陶器：備前焼片・唐津焼片・皿(伊万里)・碗(絵唐津) 自然遺物：玉砂利		S024と同一遺構	17世紀前半	M-2-f20
29	SE029	井戸跡	明茶灰色粘質土、明茶灰褐色粘質土、暗茶褐色粘質土 (6層)茶褐色砂質土 (7層)暗灰色粘質土	土師器：坏A（6層)坏A・小皿（7層)坏A(糸切)・皿Cか・坏(白色系)・坏a 須恵器片(6層) 土師質土器：大甕 瓦質土器：火鉢・鍋・香炉 瓦器：和泉型瓦器椀 中国磁器：龍泉窯系青磁碗・白磁皿（7層)白磁または染付 国産陶器：甕(常滑・唐津)・刷毛目唐津灰入・瓶(上野高取)・焼締皿(唐津) 碗(京信楽)・小坏(関西系)・染付筒型碗・染付(焼継ぎ有) 染付徳利・焼締陶器(中世)・染付長頸壺（6層)甕(常滑) 弥生土器：(6層)高坏(東北部九州系)	31→29		19世紀前半	M-2-d22・e22
30	SD030	溝跡	(2層)暗茶灰色粘質土(3層)明灰色粘質土	土師器：坏A・坏B・皿C 土師質土器：火鉢・甕 国産陶器：碗(備前)・土瓶または行平・小壺・碗(京焼風) 瓦類：丸瓦・平瓦 自然遺物：玉砂利	100→30		18世紀～19世紀	M-2-d15・e15・f15
31		土坑	灰褐色粘質土	須恵器：甕 中国磁器：白磁碗または皿片 国産陶器：甕(常滑)	31→29		中世	M-2-e22
32		土坑	灰褐色粘質土	土師器：坏cまたは椀c 須恵質土器：甕 中国磁器：龍泉窯系青磁碗・白磁片 国産陶器：擂鉢(上野高取)・折縁皿(唐津)・内野山窯皿・染付小椀	32→18		18世紀代か	M-2-e21
33		ピット	明灰黄色粘質土	土師器：坏B・皿C・小皿B 国産陶器：染付丸碗 弥生土器片	15→33,33→105		18世紀前半	M-2-d19
34		土坑	灰褐色粘質土	土師質土器：大甕・甕片 国産陶磁器：蓋(肥前系) 鉄製品：不明	34→18		近世	M-2-d21・e21
35	SK035	土坑	暗茶灰色粘質土	土師器：坏B・皿C・極小皿B・坏a(白色系) 須恵質土器：甕 瓦器：椀(東国東)・椀(和泉型) 中国陶器片 国産陶器：甕(常滑)		S046と同一遺構	16世紀前半	M-2-e17・f17
36		ピット	暗褐色粘質土	土師器：坏B			15世紀後半～16世紀前半	M-2-f16
37		土坑	暗褐色粘質土	土師器：坏B小片 国産陶器：小片(備前)・黒釉陶器片 国産磁器片 瓦類：平瓦 自然遺物：玉砂利				M-2-f15
38		土坑	茶褐色粘質土	土師器：皿C(厚手) 土師質土器：大甕片 国産陶磁器：肥前系 自然遺物：玉砂利			18世紀中頃以降	M-2-e15・e16
39		土坑	暗灰褐色粘質土	土師器：坏B・小皿B 鉄製品：不明 自然遺物：玉砂利			15世紀後半～16世紀前半	M-2-e16
40		土坑	(1層)暗灰色粘質土 (2層)明灰褐色粘質土	土師器片　(1層)坏A・皿C・小皿C　(2層)皿C 須恵器片(1層) 国産陶器：(1層)碗(肥前系)・染付小坏　(2層)碗(京信楽) 瓦類：(2層)平瓦 自然遺物：玉砂利	51→40,66→40		17世紀後半～18世紀	M-2-d15・d16・e15・e16
41		土坑	暗灰色粘質土	土師質土器：大甕 国産陶器：焼締片 国産磁器片(肥前系)			近世	M-2-f16
42		土坑	暗灰色粘質土	土師器：坏B片	49→42		15世紀後半～16世紀前半	M-2-e16
43		土坑	暗灰褐色粘質土、暗灰色砂質土	土師器：皿C 土師質土器片・大甕 国産陶器：擂鉢	43→25		近世	M-2-f16
44		カクラン	暗灰色粘質土	土師器：坏B・皿C 須恵質土器片 土師質土器：火鉢 瓦質土器：火鉢・脚 中国磁器：龍泉窯系青磁香炉 国産陶器：擂鉢(備前)・土瓶・備前片・常滑片 国産磁器：碗(広東)・皿(焼継ぎ有　肥前系) 石製品：石臼(上臼)・砥石 鉄製品：鉄釘 近現代遺物：ガラス 自然遺物：玉砂利	52→44,110→44 56→44		現代	M-2-d16・d17・e17
45		土坑	明灰色粘質土	土師器：坏A・坏B・皿C	45→68,50→45		16世紀後半	M-2-d18
46		土坑	暗茶色灰粘質土	土師器：坏B・皿C・極小皿B 中国磁器：龍泉窯系青磁片・白磁皿 国産陶器：甕(備前・常滑)・鉢 石製品：滑石模造品 鉄製品片 自然遺物：玉砂利		S035と同一遺構 （一段下げ時）	16世紀前半	M-2-e17・f17
47		カクラン	茶褐色粘質土	国産陶磁器：碗(肥前)			現代	M-2-f16・f17
48		堆積層		土師器：坏A・皿C 瓦質土器：片 国産陶器：碗(関西系)・陶胎染付碗焼締 国産磁器：外青磁碗(肥前系)		S040・051 検出時	18世紀代	M-2-d15・d16・e15・e16
49		土坑	明黄灰色粘質土	土師器：坏B・皿C 国産陶器：擂鉢(備前)	57→49,49→42		16世紀後半	M-2-e16
50		ピット		土師器：坏A・皿C	50→45		16世紀後半	M-2-d18
51		土坑	明茶灰粘質土、明灰茶粘質土	土師器：坏A・皿C 瓦質土器：鍋 中国磁器：龍泉窯系青磁碗・同安窯系青磁碗(大宰府椀Ⅰ-1-B) 国産陶器：甕(常滑)	51→25,51→40		16世紀後半	M-2-e16

遺構出土遺物一覧表

第３表　遺構出土遺物一覧表③

S番号	遺構番号	種別	土色	出土遺物	切り合い	備考	時期	グリッド
52		土坑	暗褐粘質土	土師器：坏B・皿C 土師質土器片・鉢 中国磁器：龍泉窯系青磁片・白磁片 国産陶器片(京信楽) 自然遺物：玉砂利	52→44	S056と同一遺構	近世	M-2-d16・d17
53		土坑	暗灰色粘質土、暗灰色砂質土	土師器：皿C 須恵質土器片 土師質土器：大甕片・深鉢型火鉢 瓦質土器：火鉢・鉢 中国磁器：龍泉窯系青磁碗 国産陶器片(備前) 自然遺物：玉砂利			16世紀後半以降	M-2-d17
54		ピット	暗灰色粘質土	土師質土器：大甕片	54→43		近世	M-2-f16
55		ピット	暗褐色粘質土	土師器：坏B・皿C・坏d 国産陶器：擂鉢(唐津) 瓦類：平瓦			19世紀前半	M-2-e18
56		土坑	暗灰褐色粘質土、茶褐色砂質土	土師器：坏A・坏B・皿C・小皿C 須恵質土器片 中国磁器：龍泉窯系青磁瓶片・白磁片 国産磁器片 国産陶器：擂鉢(備前)・常滑片・黒釉陶器(被熱) 土製品：土錘 瓦類：丸瓦 自然遺物：玉砂利	110→56,56→44	S052と同一遺構	近世	M-2-d16・e16・d17・e17
57		土坑	明灰褐色粘質土	土師器片・皿C	57→52,57→49		16世紀後半以降	M-2-d16・e16
58		ピット	明灰褐色粘質土	国産陶器：甕底部(常滑)	58→112		中世	M-2-d16
59		ピット	明茶灰色粘質土	土師器：皿C			16世紀後半	M-2-d18
60		ピット	暗灰色粘質土	土師器片・皿C 石製品：軽石 自然遺物：玉砂利			16世紀後半	M-2-e18
61		ピット	暗灰色粘質土					M-2-f18
62		ピット	明茶褐色粘質土					M-2-e19
63		土坑	暗灰色粘質土、暗灰褐色砂質土	土師器：底部片(糸切) 土師質土器片 瓦器：椀(和泉型)			16世紀後半以降	M-2-f18
64		ピット	暗褐色粘質土	自然遺物：玉砂利			不明	M-2-f17
65		ピット	茶褐色粘質土	土師器：坏B・皿C			16世紀後半	M-2-e18
66		溝跡		須恵質土器片 土師質土器片 国産陶器：甕(常滑)	66→25,66→40, 66→100		不明	M-2-d15・d16
67		カクラン		土師器：皿C 近現代遺物：煉瓦			現代	M-2-e18
68		土坑	明灰色粘質土、明灰黄色砂質土、明茶褐色粘質土	土師器：坏B・小皿B 国産陶器：染付筒型碗・土瓶 石製品：石臼 自然遺物：玉砂利	45→68,90→68		19世紀	M-2-d18
69		土坑	明灰褐色粘質土、暗灰色砂質土	土師器：坏A・皿C 国産磁器：白磁碗 国産陶器：片(常滑)・陶胎染付碗・片(常滑または備前)・擂鉢(備前) 弥生土器：下城式甕 自然遺物：玉砂利	69→95		16世紀後半	M-2-d18
70		ピット	暗灰色粘質土、暗灰色砂質土	土師器：坏A・皿C 土師質土器片			16世紀後半	M-2-f18
75		ピット	暗灰色粘質土、暗灰色砂質土	土師器：坏A：皿C 自然遺物：玉砂利			16世紀後半	M-2-f18
80		ピット	暗褐色粘質土	土師器：坏B 自然遺物：玉砂利			15世紀後半～16世紀後半	M-2-e18
85	SK085	土坑	明黄灰色粘質土	土師器：坏B(赤)・坏AまたはB・小皿B(油煙付着) 須恵器：甕 土師質土器：鉢・浅鉢型火鉢 瓦質土器：鉢 中国磁器：白磁碗Ⅳ類 国産陶器：擂鉢(備前　使用痕有)・大甕(常滑) 自然遺物：玉砂利		カクラン下より検出	16世紀前半	M-2-e17・e18
90		土坑	明灰色粘質土	土師器：坏A・小皿B・皿C 国産陶器：土瓶または行平・陶胎染付碗 土製品：土錘	90→53,90→45 90→68		19世紀前半	M-2-d17・d18
95		ピット	明灰黄色粘質土		69→95			M-2-d18
100		土坑	明茶灰色粘質土	土師器：皿C	100→30,66→100		16世紀後半	M-2-d15・e15
105		ピット	明茶褐色粘質土			S033下より検出		M-2-d19
110	SK110	土坑	暗茶色砂質土	土師器：小皿B・皿C 須恵質土器：片口鉢(東播系) 中国磁器：景徳鎮窯系青花皿C群 中国陶器片 国産陶器：染付(唐津) 国産磁器：白磁片 瓦類：雁振瓦 土製品：焼土塊 自然遺物：玉砂利	110→44,110→52 110→56		16世紀後半or18世紀前半	M-2-d16・d17・e16・e17
111		土坑						M-2-d21
112		土坑			25→112,58→112			M-2-d16
表土				土師器：坏A・坏B・皿C 瓦質土器：火鉢・鉢・壺(穿孔有) 中国磁器：龍泉窯系青磁碗 国産磁器：肥前系 国産陶器：甕(備前)・擂鉢(唐津)・片(備前)・刷毛目唐津・土瓶・急須 　　徳利(酒入れ)・黒釉陶器 瓦類：軒平瓦・平瓦 近現代遺物：現代陶磁器				
検出時				土師器：坏B・皿C 土師質土器：鉢・甕 瓦質土器：火鉢・鉢 国産陶器片(備前) 国産磁器片(肥前系)・くらわんか碗 瓦類：平瓦				

遺構出土遺物一覧表

第４表　出土遺物観察表①

図版番号	遺構番号	種別	器種	法量(cm)				色調・釉調	胎土	調整・装飾		備考	分類時期	R番号
				口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外面			
第11図-1	SK005	染付皿	メンコ	―	1.2+α	5.6	―	透明釉	精緻	施釉	施釉・露胎	メンコ転用		R002
第11図-2	SK005	龍泉窯系青磁	碗	―	4.2	―	―	灰緑色	精緻	施釉	施釉	鎬蓮弁文		R003
第11図-3	SK005	陶器	小坏	15.3	3.1	3.1	―	淡緑黄色	精緻	施釉	施釉・露胎			R006
第11図-4	SK005	瓦類	平瓦	5.1+α	5.3+α	1.8+α	―	文様	白色粒子・黒色粒子	ナデ	ナデ・工具ナデ	桟瓦　刻印あり		R001
第11図-5	SK005	土製品	土錘	2.7	1.0	0.9	2.1	淡橙色	石英・角閃石	―	ナデ			R004
第11図-6	SK005	土製品	メンコ	2.0	2.2	0.4	1.8	淡黄白色	白色粒子	ナデ	ナデ			R005
第11図-7	SK010	土師器	坏	―	1.5	(6.4)	―	淡橙色	角閃石・長石	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・回転糸切り		坏B	R001
第11図-8	SK010	土師器	坏	―	1.9＋α	―	―	淡橙色	角閃石	回転ナデ	回転ナデ・回転糸切り		坏B	R002
第11図-9	SK010	土師器	坏	―	1.4＋α	―	―	淡橙白色	角閃石・石英・長石	回転ナデ	回転ナデ・回転糸切り		坏B	R003
第11図-10	SK010	瓦質土器	鍋	―	4.8＋α	―	―	淡茶灰色	長石	ヨコナデ	指オサエ後ナデ		鍋B	R004
第11図-11	SK010	国産陶器		―	4.0＋α	―	―	暗茶褐色	石英・白色粒子	回転ナデ	施釉	常滑		R005
第11図-12	SK018	国産磁器	碗	―	2.0＋α	―	―	淡緑灰色	精緻	施釉	施釉	肥前系		R004
第11図-13	SK018	国産陶器	碗	―	3.6＋α	―	―	白・暗茶褐色	精緻	施釉	施釉	唐津		R002
第11図-14	SK018	国産陶器	碗	―	2.9＋α	―	―	オリーブ黄色	精緻	施釉	施釉	京焼風		R003
第11図-15	SK018	瓦類	平瓦	9.0	9.8	3.5	―	淡灰色	白色粒子	工具ナデ	ナデ・工具ナデ			R001
第11図-16	SK020	陶器	碗	―	3.4＋α	―	―	灰色	精緻	施釉	施釉	貫入あり		R004
第11図-17	SK020	瓦類	平瓦	8.3	7.8	2.4	―	灰色	白色粒子	ナデ	ナデ・工具ナデ			R003
第11図-18	SK020	瓦類	平瓦	7.0	7.8	3.4	―	暗灰色	白色粒子	ナデ・工具ナデ	ナデ・工具ナデ			R001
第11図-19	SK020	瓦類	平瓦	―	4.1＋α	―	―	淡橙色～淡灰色	石英・角閃石	ナデ・工具ナデ	工具ナデ			R002
第11図-20	SK024	瓦質土器	鉢	―	4.2＋α	―	―	灰色	石英・雲母	回転ナデ・ミガキ	回転ナデ・ミガキ			R001
第11図-21	SK035	土師器	坏	―	1.5＋α	6.6	―	にぶい橙色	赤色粒子	回転ナデ	回転ナデ・回転糸切り		坏Aか	R013
第11図-22	SK035	土師器	極小皿	4.8	1.1	3.2	―	橙色	赤色粒子・白色粒子	回転ナデ	回転糸切り		極小皿B	R001
第11図-23	SK035	土師器	極小皿	5.0	1.1	3.1	―	橙色	赤色粒子・白色粒子	回転ナデ	回転ナデ・回転糸切り		極小皿B	R002
第11図-24	SK035	土師器	小皿	8.6	1.9	5.0	―	橙色	角閃石・赤色粒子・白色粒子	回転ナデ	回転ナデ・回転糸切り		小皿B	R003
第11図-25	SK035	土師器	小皿	10.0	2.0	4.8	―	にぶい橙色	砂粒1～2mm多い・黒色粒子・褐色粒子含む	回転ナデ	回転ナデ・糸切り離し後板状圧痕		小皿B	R004
第11図-26	SK035	土師器	小皿	9.0	1.9	5.2	―	橙色～にぶい黄橙色	白色粒子・赤色粒子	回転ナデ	回転ナデ・回転糸切り		小皿B	R009
第11図-27	SK035	土師器	坏	(10.2)	2.2	(6.0)	―	にぶい黄褐色	砂粒0.1～1mm少し・角閃石・長石・赤色粒子含む	回転ナデ	回転ナデ・回転糸切り		坏B	R012
第11図-28	SK035	土師器	坏	12.6	3.0	6.3	―	橙色	長石・黒色粒子	回転ナデ・仕上げナデ	回転ナデ・回転糸切り後板状圧痕		坏B	R006
第11図-29	SK035	土師器	坏	11.8	3.3	6.0	―	にぶい橙色	砂粒0.1～1mm少し・角閃石・長石・赤色粒子含む	回転ナデ	回転ナデ・糸切り離し後板状圧痕		坏B	R005
第11図-30	SK035	土師器	坏	―	1.8＋α	5.4	―	灰黄色	石英・長石	回転ナデ	回転ナデ・回転糸切り		坏B	R007
第11図-31	SK035	土師器	小皿	―	2.2＋α	―	―	にぶい橙色	長石・白色粒子	回転ナデ	回転ナデ		小皿C	R010
第11図-32	SK035	土師器	皿	―	1.7＋α	―	―	黄橙褐色～灰黄色	赤色粒子	回転ナデ	回転ナデ	搬入品か	小皿C	R011
第11図-33	SK035	龍泉窯系青磁	碗	―	2.0＋α	―	―	灰黄色	精緻	施釉	施釉	16世紀末か		R014
第11図-34	SK035	同安窯系青磁	碗	―	1.9+α	―	―	黄緑色	精緻	施釉	施釉			R015
第11図-35	SK045	土師器	坏	―	1.2＋α	(6.4)	―	にぶい黄橙色	角閃石・赤色粒子・白色粒子	回転ナデ	回転ナデ・回転糸切り		坏A	R003
第11図-36	SK045	土師器	坏	―	2.5＋α	―	―	明橙茶色	長石・赤色粒子	回転ナデ	回転ナデ		坏B	R004
第11図-37	SK045	土師器	皿	(10.8)	2.4	―	―	黄褐色	砂粒1mm少し・長石・黒色粒子含む	回転ナデ	回転ナデ・指オサエ後ナデ		皿C	R001
第11図-38	SK045	土師器	皿	―	2.1＋α	―	―	にぶい黄橙色	角閃石	回転ナデ	回転ナデ		皿C	R005
第11図-39	SK045	土師器	皿	(16.0)	2.1	―	―	にぶい黄橙色	角閃石・長石	指ナデ・回転ナデ	回転ナデ・指オサエ後ナデ		皿C	R002
第11図-40	SK046	土師器	坏	(11.6)	2.5＋α	―	―	橙色	赤色粒子	回転ナデ	回転ナデ		坏B	R001
第11図-41	SK046	土師器	皿	(13.2)	1.3	―	―	にぶい黄橙色	赤色粒子	回転ナデ	回転ナデ		皿C	R002
第11図-42	SK046	土師器	皿	(12.4)	1.8＋α	―	―	にぶい黄橙色	長石	回転ナデ	回転ナデ・指オサエ	黒斑あり	皿C	R003
第11図-43	SK046	石製品	砥石	4.9	3.5	0.6	―	―	―	―	―			R004
第11図-44	SK053	瓦質土器	鉢	―	4.3＋α	―	―	灰色	長石・石英・白色粒子	横方向のヘラミガキ	ナデ・横方向のヘラミガキ			R001
第11図-45	SK053	瓦質土器	火鉢	―	3.0＋α	―	―	灰色	石英・長石	指オサエ	ヘラミガキ	花の印刻有		R003
第11図-46	SK053	龍泉窯系青磁	碗	―	3.1＋α	(6.2)	―	緑灰色	精緻	施釉	施釉			R004
第11図-47	SK056	白磁	皿	―	2.4＋α	―	―	灰白色	精緻	施釉	施釉			R004
第11図-48	SK056	白磁	碗	―	3.4＋α	―	―	灰白色	精緻	施釉	施釉・露胎			R007

第５表　出土遺物観察表②

図版番号	遺構番号	種別	器種	法量(cm)				色調・釉調	胎土	調整・装飾		備考	分類時期	R番号
				口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外面			
第11図-49	SK056	青磁	碗	―	1.5＋α	―	―	淡緑灰色	精緻	施釉	施釉			R006
第11図-50	SK056	土製品	土錘	4.9	1.3	1.2	7.0	橙色	石英・白色粒子	―	ナデ・指オサエ			R003
第11図-51	SK068	石製品	上臼	―	(34.0)	9.0	6.7	―	―	―	―	凝灰岩		R001
第11図-52	SK085	土師器	小皿	7.7	2.1	5.0	―	淡橙色～橙茶色	石英・角閃石・雲母・赤色粒子	回転ナデ	回転ナデ・糸切り離し後板状圧痕		小皿B	R001
第11図-53	SK085	土師器	小皿	71	1.6	5.0	―	橙茶色	石英・角閃石・雲母・赤色粒子	回転ナデ	回転ナデ・糸切り離し		小皿B	R002
第11図-54	SK085	土師器	坏	11.4	3.0	6.0	―	橙色	石英・角閃石・雲母	回転ナデ	回転ナデ・糸切り離し		坏B	R003
第11図-55	SK085	土師器	坏	11.4	3.0	5.4	―	橙茶色	石英・角閃石	回転ナデ	回転ナデ・糸切り離し		坏B	R004
第11図-56	SK085	土師器	坏	(12.7)	2.8	5.6	―	淡橙色	石英・雲母	回転ナデ	回転ナデ・糸切り離し		坏B	R005
第11図-57	SK085	土師器	坏	(11.4)	1.5	―	―	淡橙色	石英・角閃石・雲母・赤色粒子	回転ナデ	回転ナデ		坏B	R007
第11図-58	SK085	瓦質土器	擂鉢	―	3.4＋α	―	―	灰色	石英・雲母	回転ナデ	回転ナデ・ハケ目		A1	R008
第11図-59	SK085	白磁	碗	―	2.6＋α	―	―	灰白色	精緻	施釉	施釉		碗Ⅳ類	R011
第11図-60	SK085	白磁	碗	―	2.0＋α	―	―	淡緑灰色	精緻	施釉	施釉・露胎			R012
第11図-61	SK085	国産陶器	擂鉢	(35.0)	5.8＋α	―	―	暗赤褐色	橙色粒子・白色粒子	回転ナデ・自然釉・擂り目	回転ナデ・自然釉	備前　中世Ⅴ期		R006
第11図-62	SK085	国産陶器	擂鉢	―	3.1＋α	―	―	暗赤褐色	石英・角閃石・白色粒子	回転ナデ＋擂り目	回転ナデ・無調整か	備前		R009
第11図-63	SK085	国産陶器	大甕	―	5.5＋α	―	―	暗茶褐色	白色粒子・赤色粒子	自然釉	回転ナデ・付着物(胎土目)	常滑か		R010
第12図-1	SK090	土師器	坏	11.6	2.2	7.0	―	淡橙色	石英・雲母・赤色粒子	回転ナデ	回転ナデ・糸切り離し		坏A	R003
第12図-2	SK090	土師器	坏	―	2.0	(6.0)	―	淡白茶色	石英・雲母	回転ナデ	回転ナデ・糸切り離し	白色底部	坏	R006
第12図-3	SK090	土師器	小皿	8.8	1.9	4.9	―	橙茶色	石英・雲母・赤色粒子	回転ナデ	回転ナデ・糸切り離し		小皿B	R001
第12図-4	SK090	土師器	坏	―	2.5＋α	―	―	淡茶白色	石英・雲母	ナデ・強いヨコナデ	強いヨコナデ		皿C	R005
第12図-5	SK090	土師器	皿	10.2	2.1	4.0	―	淡茶白色	石英・角閃石・雲母	ナデ・強いヨコナデ	強いヨコナデ・指オサエ後ナデ		皿C	R004
第12図-6	SK090	土師器	皿	(11.2))	2.3	―	―	淡白茶色	石英・雲母	ナデ・強いヨコナデ	強いヨコナデ・指オサエ後ナデ		皿C	R009
第12図-7	SK090	土師器	皿	(12.2)	2.3	―	―	淡白茶色	石英・雲母	ナデ・強いヨコナデ	強いヨコナデ・指オサエ後ナデ		皿C	R010
第12図-8	SK090	土師器	皿	(11.0)	2.0	(5.2)	―	淡茶白色	石英・雲母	ナデ・強いヨコナデ	強いヨコナデ・指オサエ後ナデ	京都系	皿C	R008
第12図-9	SK090	土師器	皿	(12.4)	2.0	(5.7)	―	淡白茶色	石英・雲母	ナデ・強いヨコナデ	強いヨコナデ・指オサエ後ナデ		皿C	R012
第12図-10	SK090	土師器	皿	(13.0)	2.0	(6.8)	―	淡橙色～白茶色	石英・雲母	ナデ・強いヨコナデ	強いヨコナデ・指オサエ後ナデ	京都系	皿C	R002
第12図-11	SK090	土師器	皿	(13.2))	2.2	(6.5)	―	白茶色	石英・雲母	ナデ・強いヨコナデ	強いヨコナデ・指オサエ後ナデ	京都系	皿C	R007
第12図-12	SK090	土師器	皿	(13.4)	1.9	(7.0)	―	淡白茶色	石英・角閃石・雲母	ナデ・強いヨコナデ	強いヨコナデ・指オサエ後ナデ	京都系	皿C	R011
第12図-13	SK090	土製品	土錘	4.9	1.0	1.2	4.7	淡橙色	石英・白色粒子	ナデ	ナデ・指オサエ			R013
第12図-14	SK100	土師器	皿	(13.0)	2.5	(6.3)	―	淡白茶色	石英・雲母	ナデ・強いヨコナデ	強いヨコナデ・指オサエ後ナデ	京都系	京都系	R002
第12図-15	SK100	土師器	皿	(13.2)	2.3	(6.2)	―	淡白茶色	石英・角閃石・雲母	ナデ・強いヨコナデ	強いヨコナデ・指オサエ後ナデ	京都系	皿C	R001
第12図-16	SK110	土師器	小皿	(5.3)	1.4	(3.2)	―	橙茶色	石英・雲母・赤色粒子	回転ナデ	回転ナデ・糸切り離し		小皿B	R002
第12図-17	SK110	土師器	坏	(12.2)	3.3	(6.2)	―	白茶色	石英・雲母・赤色粒子	回転ナデ	回転ナデ・糸切り離し		坏B	R001
第12図-18	SK110	土師器	皿	―	2.1＋α	―	―	淡白茶色	石英・雲母・白色粒子	回転ナデ	回転ナデ・糸切り離し	京都系	皿C	R003
第12図-19	SK110	土師器	皿	12.0)	2.7	(5.4)	―	淡茶白色	石英・雲母	回転ナデ	回転ナデ・糸切り離し	京都系	皿C	R004
第12図-20	SK110	土師器	皿	(13.0)	2.0	(6.7)	―	橙茶色	石英・角閃石・雲母	回転ナデ	回転ナデ・糸切り離し		皿C	R005
第12図-21	SK110	須恵質土器	片口鉢	―	2.9＋α	―	―	淡灰色	石英・白色粒子	回転ナデ	回転ナデ		片口鉢	R006
第12図-22	SK110	瓦類	雁振瓦	17.2＋α	5.5＋α	3.0	―	灰色	長石・白色粒子	工具ナデ	工具ナデ			R007
第12図-23	SD025	国産陶器	擂鉢	―	12.3＋α	13.0	―	暗褐色	精緻	回転ナデ＋擂り目・擂り目	回転ナデ	唐津		R001
第12図-24	SD030	土師器	坏	(12.8)	3.8	(8.2)	―	橙茶色	石英・雲母・白色粒子	ナデ・回転ナデ	回転ナデ・糸切り離し		坏A	R001
第12図-25	SD030	国産陶器	碗	―	2.1＋α	(5.0)推定	―	淡黄茶色	精緻	施釉	施釉・露胎	京焼風　二次被熱(外面)	碗	R002
第12図-26	SD030	国産陶器	土瓶	―	―	―	―	内:橙緑色・外:茶褐色	砂粒少ない・黒色粒子・長石含む	施釉	施釉・露胎			R003
第12図-27	SE029	土師器	坏	(11.2)	4.5	(9.0)	―	橙色	石英・雲母・赤色粒子	ナデ・回転ナデ	回転ナデ・糸切り離し		坏A	R001
第12図-28	SE029	磁器	皿	―	2.3＋α	―	―	胎土:橙色・釉:淡緑灰色	精緻	施釉・蛇の目釉剥ぎ	施釉・露胎	貫入あり		R004
第12図-29	SE029	国産陶器	筒型碗	(6.6)	5.5	3.7	―	透明釉	精緻	施釉	施釉・露胎	肥前		R003
第12図-30	SE029	国産陶器	甕	(28.0)	8.5＋α	―	―	胎土:暗茶褐色・釉:白・褐色	精緻	施釉	施釉	刷毛目唐津		R002
第12図-31	SE029　6層	土師器	坏	―	1.0＋α	(7.6)	―	橙茶色	石英・角閃石・雲母・赤色粒子	回転ナデ	回転ナデ・糸切り離し		坏B	R001
第12図-32	SE029　6層	土師器	皿	―	2.5＋α	―	―	橙茶色	石英・角閃石・雲母・赤色粒子	ナデ・強いヨコナデ	強いヨコナデ・指オサエ後ナデ		皿C	R002
第12図-33	SE029　6層	国産陶器	壷	―	12.5＋α	―	―	暗灰色	石英・白色粒子	回転ナデ	施釉	常滑		R003
第12図-34	SP015	国産陶器	向付	―	1.5＋α	―	―	白灰色	精緻	施釉(一部剥離あり)	施釉(一部剥離あり)	唐津か		R001
第12図-35	SP015	国産陶器	碗	―	1.5＋α	―	―	茶色	精緻	施釉	施釉	唐津系		R003
第12図-36	SP080	土師器	坏	―	1.2	5.4	―	橙色	石英・角閃石・雲母・赤色粒子	回転ナデ	回転ナデ・糸切り離し		坏B	R001
第12図-37	SX044	瓦質土器	火鉢	(20.4)	2.8	18.0	―	黒灰色	長石	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ			R007

第６表　出土遺物観察表③

図版番号	遺構番号	種別	器種	法量(cm)				色調・釉調	胎土	調整・装飾		備考	分類時期	R番号
				口径／最大長	器高／最大幅	底径／最大厚	孔径／重量(g)			内面	外面			
第12図-38	SX044	瓦質土器	鉢か	(18.8)	5.7	―	―	黒褐色	長石	ヨコナデ	研磨状のナデ			R006
第12図-39	SX044	龍泉窯系青磁	香炉	―	3.7＋α	―	―	黄緑色	精緻	施釉	施釉			R005
第12図-40	SX044	国産磁器	紅皿	(8.9)	5.1	3.2	―	透明釉	精緻	施釉	施釉・露胎	「大阪新町お笹紅」 肥前		R004
第12図-41	SX044	国産磁器	碗	―	4.2＋α	4.6	―	透明釉	精緻	施釉	施釉・露胎	肥前		R003
第12図-42	SX044	国産磁器	染付	(9.8)	2.3	(6.5)	―	(染付)青白色に染付	精緻	施釉・染付	施釉	肥前系　焼き継ぎ有 高台内側に朱色で名を記		R002
第12図-43	SX044	国産陶器	擂鉢	(31.2)	12.2	(14.0)	―	暗赤褐色	白色粒子	回転ナデ・回転ナデ＋擂り目	回転ナデ・切り離し後無調整	備前　近世Ⅰ期		R001

調査区東側（西より）

調査区西側（東より）

写真図版 2

SK005 検出状況（東より）

SK035 土層断面（東より）

SK035 完掘状況（東より）

SK085 土層断面（南より）

SK085 完掘状況（南より）

SK110 完掘状況（北より）

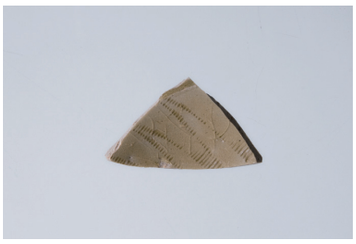
SD030 完掘状況（北より）

SE029 井筒検出状況（西より）

第 11 図 -1

第 11 図 -4

第 11 図 -6


第 11 図 -34

第 11 図 -45

第 11 図 -51　上面

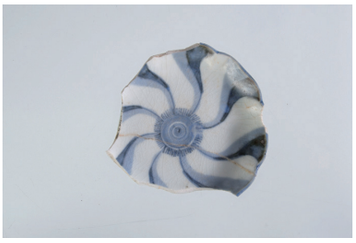
第 11 図 -51　下面

第 12 図 -22

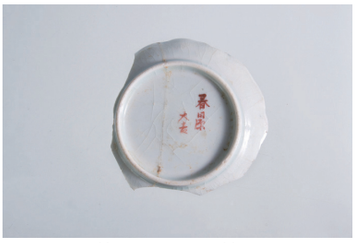
第 12 図 -23

第 12 図 -27

第 12 図 -30


第 12 図 -42　内面

第 11 図 -22 ～ 25・28・29


第 12 図 -42　外面

第 12 図 -43

報　告　書　抄　録

ふりがな	おおともふない　ちゅうせいおおともふないまちあと
書名	大友府内24　中世大友府内町跡第113次調査
副書名	集合住宅建設に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	大分市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第143集
編著者名	池邉千太郎・小野綾夏　株式会社九州文化財総合研究所(業務責任者　井上索裕)
編集機関	大分市教育委員会
所在地	〒870-8504　大分市荷揚町2番31号　TEL(097)534-6111(代表)　FAX(097)536-0435
発行年月日	西暦2016年3月18日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
ちゅうせいおおともふないまちあと 中世大友府内町跡第113次	おおいたしかないけまち 大分市金池町	44201	201051	33°13′58″	131°36′55″	20150805～20150918	234.2㎡	集合住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中世大友府内町跡第113次	都市	中世・近世	廃棄土坑・溝状遺構・井戸跡	土師器・中国陶磁器・国産陶磁器	

要約

調査地点は、中世大友府内町跡の北西端に位置している。中世府内のまちの様子を描いた「府内古図」では「下町」に、近世の府内城下町では外町の「東新町」にあたり、中世と近世の遺跡が重なる部分である。中世の「下町」西側には、「大智寺」と「大雄院」の記載が見られ、「下町」の裏手には寺院が存在していた。現在東側には長浜(塩九升)通りが通り、中世では第4南北街路、近世では日向道推定地に相当し、中世から現在まで続く市街地の主要幹線道路沿いにまちが形成されていたことが分かる。周辺では、長浜(塩九升)通りを挟んで東側において中世大友府内町跡第108次調査が実施されており、近世及び中世の道路状遺構や、井戸跡などの町屋裏手の状況が確認されている。

調査の結果、近世においては、18世紀から19世紀の井戸跡やまちの西側の区画溝と想定される溝状遺構が検出された。近世の「東新町」は17世紀中頃に形成されたといわれており、これらの遺構は「東新町」が形成された後の生活空間の様子を示している。

中世においては、16世紀前半から後半の土師器や生活雑器を含む土坑を検出した。これらの土坑群は、第4南北街路を基準とした奥行き30mの推定町屋域の範囲よりさらに西側に集中しており、周辺の調査で確認した町屋の空間利用とは異なることが考えられ、「下町」の一部ではなく、「大智寺」や「大雄院」との関係性が示唆される。

大分市埋蔵文化財発掘調査報告書　第143集

大友府内24
中世大友府内町跡第113次調査

― 集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ―

2016年3月18日

発行　　大分市教育委員会
　　大分市荷揚町2-31